
永久の契約

由乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の契約

【Zコード】

N13380

【作者名】

由乃

【あらすじ】

中学を卒業したばかりの神無。他の人とちょっと違った能力を持つている以外はいたつて普通の女の子だった。ある日異世界に連れていかれるまでは

1 「わたし

「 ちあん、神無ちゃん 「

誰かがわたしを呼んでる

「起きて、起きてよ 「

起きなこい。起

つるわいなあもつ

声の主は生の絨毯に寝転んでわたしを呼んでる。

ちゅつと揺すられただけで寝から覚めてあげるわたしではない。

3月。

だいぶ暖かくなってきたけど、ヤーラー服にセーターを羽織つただけの格好じゃ外で寝るのには寒いみたい。

「 ひとなとこで寝てや風邪引こやつよお、起きて神無ちゃん

「

語尾をのぼすこの話し方は由利恵だ。

ふつ、泣き声、かわいい。

「起きてってばあ 卒業式で疲れたかもしれないけども 今週はママの手伝いしなきやなにに 」

「

わたしが無視して寝たふりを続けると、由利恵は本気で泣きそつた声で必死に起こしにかかる。

由利恵はわたしより1つ年上の、ホームでのお姉ちゃん。

ホームにいる期間としてはわたしの方が長いけど、ここは年功序列制度だから由利恵のほうが偉い立場にいる。

偉いって言い方は変かな。

だから1つしか歳が違わなくとも由利恵はわたしの面倒を見なくちやいけない。

このホームはなんらかの理由で子供を育てられない親が、子供を一定期間預けられる施設になつていて。

由利恵は5年前に来た。

本人が言い出さないならこっちからは聞けないけど。両親の離婚が原因だそうだけど、ただ単純な離婚、それだけじゃない理由があるんだろうとわたしは予測してる。

時々見せる、由利恵の曇った瞳の先には壮年期くらいの男がいるから、きっとそうゆうことなんだと思つ。

父親の家庭内暴力か、ひどい浮気が。

失礼かも知れないと、少しだけ由利恵に同情した。

それに比べてわたしはアラウドとかはなこからある意味マシなんだと思う。

何て言つたつてわたしは物心がついた頃にすでにホームにいたんだもん。

正確に言つて、6歳くらいまでの記憶が全くない。

ホームのママから聞いたところによると、文字のまんま、そのままの道に行き倒れていたらしく。

捨ててくれたのがママで、身元不明・年齢不詳なわたしに“神無”と名付けてくれた。

わたしを拾つたのが10月だから、そこからきた名前らしい。

このホームの名前が三田月荘だから、その名前を借りて“三田月神無”と名乗つてるのがわたし。

いろんな理由があつて、元々の苗字を出せないホームの子も、姓を三田月にして生活している。

契約期間を過ぎても親が迎えに来ない場合、高校卒業まではホームで面倒を見てくれて、大学生かそれと同等の年齢になると独り立ちするように決まつていた。

わたしは中学を卒業したわけだけど高校に進学する気もなかつた。

だからこれから3年間アルバイトして独り立ちできるようお金を探めるつもりなんだ。

ママは交友関係が広いから、そういうた繋がりでわたしのアルバイト先も見つけてくれたのだから助かった。

今時中卒でアルバイト雇つてくれるといいがまくはないから正直あたしだつて不安だったもん。

そんなこんなでわたしはわたしの人生に満足している。

身体はなんの不自由もないしね。

思い出せない過去も、無理に思い出すつもりもない。

忘れていたほうが良い事、だつてあると想つ。

そんなどこにでもいるよつたしといつ小娘だけど、他のみんなと決定的に違うことが一つだけある。

それはわたしが動物や植物の声が聞こえるといつ

こつやつて静かに目をつむつて風を感じると、囁くよつな、小さな小さな声が聞こえてくる。

わたしはみんなの囁きを聞くのが楽しみなんだ。

純粹に生きることを喜びと感じてる彼等が愛おしい。

それが動物になると、人間に对する文句を言つ賢いヤツもいるから飽きることなんてない。

動物、特に犬や猫の傍でじつと聞き耳を立ててるわたしの姿が他人にどう映ってるかなんて、中学に上がるまで考えられなくて。

わたしはただ近所の奥さん方がする世間話を聞いてる程度にしか思つてなかつたけど。

はたから見れば動物の近くでしゃがみ込んで、皿をキラキラさせつて變な子、ていう目で見られてたみたい。

友達と遊ぶより生き物たちの声を聞いてる方が楽しかつたから、人間付き合いは悪くなる一方で。

いつの間にかわたしは不思議ちゃんのレッテルが貼られてたし、友達と言える子もいなくなつてた。

イジメられはしなかつたけど避けられてたのは知つてたから、自分から仲間に加わるうなんて無駄な努力はしなかつた。

不思議で、奇妙な能力を持つてるわたしが残念に思うのは、彼等の声はわたしに届くのにわたしの声は彼等に届かないこと。

唯一会話できる動物はわたしが拾つた一匹の猫だけで

「んふつー?」

「うわ べちやべちや 「

「うわ べちやべちや 「

なかなか起きないわたしに痺れを切らせた由利恵はママを呼んできたらしい。

く、卑怯な

『氣の強いわたしがこのホームで勝てないのはママだけなんだ。

顔の上に落とされた濡れたタオルを剥がすと、視界には由利恵の近すぎる顔が入ってきた。

「うわわっ由利恵、近い近い！」

「だつてえ。神無ちゃん起きないからお目覚めのチューしかやおつかなつて思つてえー！」

「さつきまで泣きそうな声で起い」としてたくせに…。」そう言って傷つけなによつに氣をつけて由利恵の頬つぺたをにぎりつと摘むと、由利恵はへりつと笑つて言つた。

「もへ、時間過ぎやつたからまあいつかあーつて思つて

「いや、ダメでしょ」

「ええダメよ。これから手伝つてけりょうだい！20人分作るのは大変なんだからつ。2人とも30分の遅刻よ、時間厳守は決まりなんだから罰則よ」

ほわほわした由利恵の意見にビシッといつこむママの意見には賛成。

ママを入れてホームには20人の女子がいるわけだから1人で料理

をするのは大変だもんね。

でも罰則はめんどくわー。

よつこいしょと腹筋で起き上がるわたしの動作と一緒に身体を起した由利恵は、むーっと唇を尖らせた。

「さっきまで全然起きなかつたのに神無はママの言つこひはしつかり聞くんだよねえ しかも罰則なつちやつたよう」

由利恵がわたしをジト田で見る。

若干むくれてしまつた由利恵は結構イジケやすいタイプだから早めに機嫌をとつたほうが良いかもしれない。

「す、ぐく眠かったの。『めんね、起きれなかつた』

わたしは座つたままの体勢で由利恵を見た。

この位置ならちよつとも由利恵を上田遣いに見れるのだ。

つまり計算したぶりつ子で平謝りしてゐるわけで。

自分的には気持ち悪いんだけど由利恵やママには効果抜群な技なんだ。

自分で言つと惨めになるけど、わたしの容姿はすくなく見えるらしくて、なんでも庇護欲とやらを誘つよつた姿をしてるひしこ。

田はおつせこし、やたらと睫毛は長こし。

そのくせ鼻が高いとは言えないからむつ童顔一直線。

まあ中身は少々オヤジ化した生意氣な娘なんだけど。

「許して。由利恵、ママも、ごめんなさい」

「え、ううん……卒業式疲れたもんねえ、いいんだよお黙かつたよねえ」

はううと黙つて由利恵はわたしの頭をなでなでして顔を赤らめてる。

「や、そうね？まあ まあ仕方ないわ。やれ、2人とも中に入つて？今日は神無が疲れてたつてことで罰則は無しにするわ

手に持つた濡れタオルを無駄にパタパタさせたママの、お許しをいただいた瞬間内心ガツツポーズをきめてるわたしに2人は気づいてないだろ？

哀れな。

「ううつーあらがとうママ、由利恵つ

ぱつと立ち上がつて勝利の笑みを浮かべたわたしの右手には、ママの柔らかい手が。

左手にはわたしの手より第一関節分大きな由利恵の手が繋がれた。

「早く戻ろつーみんなのために夕食作らなきやつ

「 もひつ、 神無は調子いいんだからー。」

「 本当だよお でも神無の“ごめんな”はかわいすぎるわ 。 萌え
萌えだよお 」

呆れたよひに笑うつ憂しいママと、けよひと思考が脱線ぎみだけど良
い子な由利恵と。

ホームで生活する心に影をもつた仲間と、我が儘なわたし。

いつの間にか傍にいた黄金色の毛をもつ不思議な猫はわたしの脚に
擦り寄つてくる。

みんなが傍にいるこんな毎日がわたしにとつて幸せですべてなんだ。

『 今日はビーフシチューみたいだね』

リリンと涼しげな鈴の音と共に聞こえてきたのはこれまた可愛らし
い高音域の声で。

これはわたしが唯一話せる猫のルールシェル。

ルールシェルという名前はルールシェル本人から聞いたのであって
わたしが付けた名前じゃない。

長いからルーとかルルつていつもは呼んでいる。

ルールシェルはどこか金持のお金の飼い猫だつたんじやないかと
わたしは思つてゐる。

金色の毛並みは完璧に整ってるし、アメジストの瞳もすくべキレイで神秘的。

猫にしては大きいから外来種でしかも血統書付きの高級な御猫様なのかもしない。

話す内容だって人間と同じだし、なんだか行動動作一つ一つに気品を感じさせられるの。

もちろんというか、食べ物もわたしたちといつしょ。

「やつた！ 今日ビーフシチューなんだつ」

「あら、よくわかったわね」

まだ言つてなかつたのに、と驚いたようにママにわたしはルルシエルを指差して言つた。

「ルルがビーフシチューだって教えてくれたんだ」

「ああ、ルーは鼻が良いもんね」

「鼻が良いくて便利だねえ」

この2人はわたしが動物や植物の声が聞こえることを信じてくれて、理解もしてくれてる。

受け入れてくれる人はなかなかいないだろうから、わたしの秘密を知つてもなお優しくしてくれる2人に会えたことに感謝だ。

「ルル、今日は早く帰ってきたんだね？」

そう問うとルールシェルは大きなアメジストの瞳をわたしに向けた。

『 ああ、ちょっと嫌な気配を感じたからね。早めに帰ってきたんだ。カンナと一緒にゆっくり食事を摂ると思つと僕としては嬉しいよ。久しぶりに一緒に寝れるしね』

ルールシェルは可愛い声に似つかわす大人っぽい口調で話す。

時々甘い言葉すらかけてくるものだから驚きだ。

こんな調子でルールシェルとも一年半の付き合いになるのだ。

「ねえねえ、ルーは何て言つてるのー？」

「えつと、みんなと一緒に飯食べるの楽しみだつて」

そのままを伝えたらちょっとばかり問題だから、自分なりに要約してみる。

「ふうん みんなと、ねえ」

『 みんなと、などとは言つてないけどな。君なんかとは特に』

「いひ、ルル。やつこつこつと言わないの」

わたしは由利恵の疑わしげな視線を軽く流したルールシェルの投げやりな言い方を嗜めた。

なぜか由利恵とルルは相性が良くないみたい。

由利恵にいたつてはルルの声が聞こえないはずなのに。

「どうせ神無ちゃんと同じ飯食べたいとか一緒に寝たいとか言つてゐるでしょお。猫のくせにやらしい

当たらずも遠からず。

「あははっ！ 由利恵にとつたらルルが一番のライバルね

なんでも由利恵を煽る！

「やうだよおママ。神無ちゃんがルーに取られやうつ

「やうよ、猫とはつてもルーはオスだからね。神無を狙つてるかも

「ルーなんかに神無ちゃん渡さないもんっ！」

『なに言つてゐるの。もともとカンナは僕のだから』

当の本人を蚊帳の外に置いた3人の、テンポ良し会話を聞きながらわたしはやれやれと首を振るのだった。

2 「ややかな幸せを

わたしたちは早速夕食の支度を始めた。

由利恵とママが食器を用意する間にわたしてビーフシチューを作る。

ママは器用だけなぜか料理だけは劇的に下手なんだ。

だからいつも簡単なアシㇼえだけ頼んで、それ意外は由利恵の子を作る。

由利恵はもともと料理が上手いから、両番が回ってきたときはわたしが練習もかねて調理をすることになつてゐる。

「やあたよー、由利恵。味見してみて?」

わたしが小さな器にとつたビーフシチューをテーブルの上に置くと、由利恵が来るより早くルール・シヨルがすたつとテーブルに乗つた。

「ルル?」

「あーーーーーなんでルーが先なの?ー!」

ルルは小さな舌でペロリとシチューを舐めると、ふむ、と頷きわたしを見る。

『美味しい。ちゅうじ良こ味付けだよ』

「ルルーーーー神無ちゃんはわたしに味見頼んだんだよーなんでル

ーが味見してんのー』

『君が味見しなくてはならない理由なんてないだろ』

テーブルを拭いてたタオルを使って、ルールシェルをしつしと追い払つと由利恵はぱーつと頬を膨らませた。

『ルー生意氣い！！言葉はわからなくたつてなんとなく言つてることわかるんだからねつ！神無ちゃんの料理の味見はわたしの仕事なの』

由利恵にルールシェルの言葉は解らないはずだから。

普通の猫みたいに“にゃーん”て鳴いてるよつにしか聞こえてないだろうに。

なんとなくわかつちゃうなんて、逆に仲良いからなんじやないかと思ひのはわたしだけかな。

『カソナと同性の君が僕に嫉妬するなんて、実に愉快だよ』

ルールシェルはそう言つて、すたんとテーブルから飛び降りた。

わたしは新しい器にシチューをとつてルールシェルに敵意むきだしな由利恵がしゃべりだす前にじいっと渡した。

『はい、由利恵ー味見よろしく』

『むはーい。うんつ美味しいよお。だいぶ料理うまくなつてきたね神無ちゃん』

由利恵はにっこりと満足そうに笑うと、床から自分を見上げてるルール・シエルを見下ろした。

わたしは2人の間に見えない火花が散つてるようと思えた。

なんでこんなに2人は敵視しあってるんだろうか。

ルール・シエルはいつも昼間から夜にかけて外に出てるから家にはいなしけど、時々こうして早く帰つてくると飽きもせず由利恵と揉めている。

「『』飯できたー??」

お腹をすかせたみんながキッチンに入つてくると、由利恵とルール・シエルの冷戦は終わりを告げた。

2人を呆れ半分で見てたわたしも最後の仕上げにかかった。

「それでは、いただきまーす」

ママの声がかかつてわたしたちの夕食は始まる。

食事はみんなで摂るのが決まりみたいになつてて、何個かのテーブルに別れて食べる。

ルールシェルは基本的に直接食器に口を付けて食べたりしない。

だからわたしが食べさせたあげでる。

わたしの膝に行儀良く座つてるルールシェルの口元に、小さく切つたビーフを持つて行くと、これまたパクッとうまく食べるのだ。

好き嫌い無しに食べるルールシェルだけど、こんなにいろんなモノを食べて平気なのかと時々心配になる。

『美味しいね。味も良いけど、やっぱりカンナが食べさせてくれると美味しさが増すよ』

「ルルつて大袈裟」

わたしがクスッと笑うと、向かい側に座つてサラダを頬張つてた由利恵が面白くなさそうに言つた。

「なにい？神無ちゃんから食べさせてもらひと余計美味しい、とか言つてるわけえ？」

あはは 近い。

『この女子には僕の声が聞こえてるのかな？』

『や、聞こえてないでしょ？』

『思考を読まると思つと悲しくなるな。あ、カンナ』

「うん？ちょつ ん」

わたしを見上げて話してたルールシェルがいきなり脣付近を舐めてきてびっくりした。

「……なにやつてんのぉおー…」

由利恵がガタンと立ち上がったのと同時にルールシェルは涼しい顔をしてぴょんとわたしの膝から飛び降りた。

『「ひつひつせま。カンナの口元に付いたシチューは格別に美味だつたよ』

「もつ、ルル！」

「逃げるなあルーつー！」

流石に声を上げたわたしと、半分叫び気味の由利恵に背を向けたルールシェルは、長く綺麗な尻尾をふるんと一振りして部屋をでて行つた。

「もう！ あれは本当に猫お？？ 絶対わかつててやつてるよねえ？！ わたしの神無りゃんにキスしたあ！ 許せないいっ！」

「キスつて言つても口の端だなごね？」

「あははは神無のファーストキスはルーになりそうね？」

「猫に神無りゃんのファーストキス取られるなんてやだよお？！」

「まあまあ、由利姉落ち着いて？」

「相手は猫なんだからさ

「あつはははつー！」

ママの爆笑と、由利恵を宥める姉妹たちの笑い声につられてわたしも声を立てて笑った。

わたしはみんなが笑つてられる空間を、幸せ、だと感つた。

3 | 大切な何か

「ふあーーっ

今日で着るのは最後になる制服のセーラー服を脱いで、大人が3人一気に入つても狭くないだろう広い浴槽に浸かつたわたしは大きく息を吐き出した。

浴槽の縁に両腕を組み、その上に顎を乗せる」の体勢が一番楽。

視界にはわたしと同じく田焼けしてない由利恵の背中が映った。

タオルを使ってヨシヨシ擦る由利恵を見ると、その肌がちょっと可哀相に感じちゃう。

由利恵はザバザバと豪快にお湯をかけて泡を流すと、黒く長い髪を一つに束ねてわたしの隣に身体を沈めた。

「ふーつ。極楽だあー」

「そうだねー」「

由利恵はわたしと同じように浴槽の縁もたれかかると、こっちを見てふやあと笑う。

「当番の日は大変だけど、つくりお風呂入れるから良いよねえ」

「完全に貸し切りだしね」

「ねー。やつだ、今日で神無ちゃんも中学卒業だねえ。本当に高校は行かなくてよかつたのぉ？」

「うん、わたしなりたいモノとかないし」

最後のお湯は温めで長湯してものぼせないから、由利恵とわたしはいつもして風呂で長話をしたりするんだ。

由利恵の高校の話を聞いたり、今好きだとこいつアイドルの話を聞いたり。

わたしは今まで通つてた中学の話をした。

他愛のない世間話だけど、由利恵と話すのは楽しい。

いちいち反応が面白いんだもん。

「ええ？..じゃあ学年で1番人気な男子に告られたのぉ？..」

「まあ。でも友達情報だから1番かどうかはわからないけど」

「わたしの神無ちゃんに手え出したな ま、相手にされないだろうけど。中学男子なんて」

「あははは、由利恵、キャラ変わつてゐよ？それに手出されでないか

「ひ

いつもの間延びした話し方の由利恵と、今の由利恵、どちらが素なのかわからないから面白い。

「わたししがこんな性格だつて知らなくて告つてるみたいだつたら
ら断つたよ」

ついつい話しが弾み1時間はお湯に浸かってたわたし達は流石に熱
くなつて、浴槽の縁に腰掛けて熱を冷ました。

「いるよねえーそういう人。勝手に理想像と重ねてくる人つて嫌」
思い当たる節があるのか、由利恵は眉をしかめて腕を組んだ。

もにんと豊かな胸が盛り上がる。

本人は気にしてないだろうけど、わたしは由利恵の腕に圧迫され
て形を変えた大きい胸をチラリと見て一人落ち込んだ。

由利恵はグラビアアイドル並にスタイルが良い。

もう成長が止まつたようで、完全に成熟した女の人の体型をしてる。
それに比べてわたしといえど。

1歳くらいしか歳が違わないので胸なんか由利恵の半分もないのだ。
ビキニなんか着たら悲惨な結果になるに違いない。

わたしみたいな幼児体型にはスクール水着がお似合いだ。

童顔に幼児体型なわたしはせめて髪型だけは大人っぽくしようと思
つて前髪を伸ばしてるけど 効果はあるのかわからない。

今時の中学生はみんな発育が良いから、自分だけ取り残されてるみたいで正直虚しい。

悲しいかぎりだ。

そんなことを考えてたら、知らないうちに由利恵の身体凝視してしまつていたようだ。

由利恵と田が合つたわたしは無性に恥ずかしくなつてふいつと視線を反らせた。

わたしの視線に気づいてた由利恵は、自分の胸とわたしの胸を見比べて納得したように頷く。

「神無ちゃん、大丈夫。きっと大きくなるよ。それに神無ちゃんはそのままでも十分可愛いから平気! 胸なんて脂肪だよ!」

「 ありがとう?」

由利恵の絶妙なフォローに対してもお礼を言つたものの、わたしはガクつとうなだれた。

制服を着てないと小学生としてもイケちゃいやうなわたしが、由利恵みたいなセクシー体型になれる日はくるのだろうか。

第一次性徴は確かにきたはずなのに 。

「あんまり氣にする」となつてえ。神無ちゃんは神無ちゃんなんだからあ。ね?」

そろそろ上がると言つてわたしの頭を撫でる由利恵はいつも通り、ふにゅーっと笑つてた。

由利恵の脳天気そうな笑顔を見ると細かいことで はないけど、悩んでることがバカバカしく思えてくるのだから不思議。

「ん、上がろつか

「今日もいつぱい話したねえ」

「半身浴つて身体に良いって言つから、ちよつとじよかつたね」

わたしと由利恵がお風呂から上がり、また他愛ないおしゃべりをしながら着替えを終え、掃除を済ませるともう時計の短い針は12を回っていた。

みんなが使つたお湯を流し、お風呂場と脱衣所の掃除はなかなかの労働なんだ。

由利恵はちやちやつと自分の仕度を済ませてわたしを呼んだ。

「神無ちゃん、こりちきて座つてえ。髪の毛乾かしてあげるうー」

「ありがとう」

由利恵は一緒にお風呂に入るといつぱり良いほどわたしの髪まで乾かしてくれる。

すゞく気持ち良いから、ついついウソつコワシクスしゃうんだ。

優しく髪を梳く由利恵の指を心地よく感じていたわたしが、ふとむつていた目を開くと大きな鏡ごこちに由利恵と目が合つた。

「？」

由利恵の瞳はなにか言いたそうに揺れているからわたしは首を傾げて見せる。

「由利恵？」

首を傾げるわたしを由利恵は目を細めて見つめてるだけでなにも言わない。

その間にも由利恵の手は動いていて、わたしの量の多い髪は大分乾いてきた。

じばらくわたしと由利恵はそのまま見つめ合つてたけど、由利恵がふつと表情を緩めたことで微妙な雰囲気は壊された。

由利恵は時々こうやって無言で視線を合わせてくるんだけど、わたしはその意味がよくわからないから反応しようがないんだ。

「由利恵？」

「はあい終わつたよーつー神無ちゃんの髪の毛はたつぱりしてて柔らかいよねえ」

「量が多いと夏暑いし大変だよ。由利恵みたいにストレートならいいんだけど」

由利恵を伺うように声をかけてみるが、どうやらわざわざしゃうし、由利恵がなにか言つまで待つことにした。

由利恵はわたしのくせつ毛を氣に入つてゐみたいで、いつもドライヤーをかけ終えると指にクルクル巻き付けて遊ぶ。

「えーっ。いいじゃんー！ 神無ちゃんもともと髪の色素薄くて茶色っぽいし、クルツしてるとふわふわでお姫様みたいだよお？」

お姫様って と苦笑いなわたしを「△△△」と見やる由利恵。

わたし姫つてキャラじやないし

「あ、そろそろ寝なくちゃね。早く部屋戻る」

「明日から春休みだからねえ。つこつこゆつべつしちやつたあー」

「ほんと。ママに見つかつたら怒られちゃいやつ

「せつがく罰則なくなつたんだからビラれたくないねえ。静かに戻るわ」

いつもよつなやり取りをして、私たちがお互いの寝室に帰つた頃にはもう他のみんなは寝静まつてて、ホームはしんとしていた。

ここでは1人1人小さい個室があてがわれてる。

シングルベッドと勉強机、洋服タンスが1つ、と必要最低限の家具しかない部屋だけどプライベートな空間があるのはすごくありがた

い。

足りないものは自分のお小遣で買い足したりする。

わたしの部屋の机には、もう勉強道具は置いてないから空いたスペースに植物を置いていた。

小さなサボテンとサンセベリアがわたしの癒し。

窓際には大きめなバスケットがあつて、その中にはフワフワなクッションが入れてある。

それはルールシェルが寝るためのもの。

夜中に帰つてくることが多いルールシェルは、わたしに気を使って起こさないよ、とのバスケットの中で寝てるんだ。

布団に入つてきたところでわたしは起きないだらうけど、そういうさりげない気配りが出来るところはすごく紳士的だと思つ。

私が部屋に入ると、ほんわりと室内が温めてあつた。

ルールシェルが暖房を点けておいてくれたみたいだ。

「ルル、部屋あつためてくれてたんだ」

ベッドの上で寝転んでるルールシェルは顔だけ起こしてこちらを見た。

『遅かつたね、カンナ。ずいぶん長湯してたみたいだけど、湯冷めしないように、早く中に入りなよ』

そう言つとルールシェルは起き上がりつて器用にかけ布団を捲つた。

彼はわたしより確実に頭は良いし、気が利くと思つ。

宿題で出た数学を教えたら、3日で法則を理解して逆にわたしが教わる立場に変わつたくらいだし、電化製品の使い方もすぐに覚えた。

猫のくせに甘くみると痛い田にあつ。

「ありがと。ルルは良い田那になるよ」

『ふふ。うれしい褒め言葉だね。ぜひカンナの夫にしてくれる?』

ルールシェルは口ロ口ロと可愛い声で笑い、ベッドに潜り込んだわたしを見下ろした。

「そうだねー。ルルが猫じゃなくて普通の人なら結婚したいかも。あ、わたしが16になつたらね?」

わたしが[冗談混じりに答えるとルールシェルはずいと顔を近づけてきた。

大きいアメジストの瞳にわたしが映つてゐる。

本物の宝石みたいに綺麗なルールシェルの瞳に見つめられるとなぜかドキドキするんだ。

猫相手になに考えてるんだか

『僕が 人間なら良いんだ? そしたら君は僕の妻になるんだね?
16になつたら良いんだね?』

「へ?」

あまりにも近距離で話すものだから、ルールシエルのヒゲがちゃん
ちゃん顔に当たつてくすぐつたい。

「ふははっ! ルルのヒゲくすぐつたいよつ!」

『質問に答えてくれたら離れるよ』

「いやーつーそのまましゃべらないでつ!」

『』

仰向けになつてるわたしに覆いかぶさるよつにお腹の上に乗つかる
と、ルールシエルそのままザラザラな舌でわたしの首筋を舐めてき
た。

「うひやつあ! やだやだ、くすぐつたい! あははっ!」

『 カンナが真剣に聞いてくれない限り止めないよ
』

ケラケラ笑つわたしに、ルールシエルは不機嫌そうに答えた。

そんな、猫の求婚じみた台詞に真剣に答える人なんていないから!.

「もつつ えいつ！」

『わづ…』

わたしはルールシェルを抱きしめると身体「」と「」と横向きになつた。

猫と人どじや根本的な力が違うから、いくらルールシェルが猫にしては大きめな身体をしてたとしても簡単に退かすことができる。

そのまま胸に抱えこむように閉じ込める、ルールシェルはむきゅーと可愛い声で鳴いた。

「捕まえたつ！ 可愛いルル。 もう寝ましょうねー」

『苦しい』

猫撫で声を出すわたしに向かつて腕の中から苦情を言つてくるルールシェルだけど、本氣で嫌がつてゐるようではないから離してあげない。

ルールシェルの首辺りは毛がすごく柔らかくて気持ちいい。

ほんのり石鹼の香がする。

鼻を寄せてスリスリと顔を擦り付けるようにすると、首輪代わりに付けてるオシャレなチョーカーに当たつて少し痛い。

『カンナ、僕にとつてもそれはくすぐつたい』

「さつきのお返しだよ。ルルはすごいふわふわだね。気持ちいい
あー寝ちゃいそう」

時間が遅いということもあって、だんだんと瞼が重たくなってきた
わたしは、不満を漏らすルールシエルの声を子守唄にそのまま意識
を夢に放った。

4 | 夢と現実の間

『 カンナ、カンナ。ごめん もう時間がないんだ ごめんね』

夢ひつつに聞こえてきたこの声はルールシエルの ？

あつたかい布団とルールシエルの柔らかい毛並みの誘惑に抵抗して目を開けようと思うけど、なかなか難しい。

無理、起きれない 。

身体がひどく重い気がする。

そもそも今が現実なのか夢の世界なのか、判断できない。

『 カンナ、ごめんね 』

眠ってるわたしに何度も謝るルールシエル。

どうしたの？

そんなふうに謝られたら不安になるよ？

わたしは心配になつて起きようと瞼に力を入れた。

が、うまく力が入らない。

え ？

起き上がるうと腹筋に力を入れただけぞそれもできない。

いつも何気なくやつてる開眼という作業ができないとなるとわたしもだんだん焦りが生じてきた。

まるで金縛りにあつたかのようにわたしの全身は硬直してゐる。

恐怖という感情が湧かないのは、わたしの頬に擦り寄るルールシェルの存在があるからだらうか。

状況は良くわからぬけどどりあえずルールシェルが傍にいるなら安心、と力を抜いたわたしの唇にチクリと痛みが走つた。

「 ！」

ルールシェルの鋭い歯がわたしの唇を傷つけたみたい。

噛み付かれたことがないから驚いたけど、それ以上にびっくりしたのはルールシェルの舌。

ルールシェルの舌がわたしの血をペロペロと舐め、そのまま唇を割つて口内に入り込んできた。

力の入らないわたしは、ルールシェルのされるがままになつてゐる。

おい、ルルの変態つ

口に舌入れるのはさすがにやめてつ

わたしは心の中で精一杯ツツコミを入れるけど全く意味がない。

少しして好きなようにさせてたルールシェルの舌に違和感を覚えた。

さっきまで小さいザラザラした舌がわたしの舌にチヨンチヨンと当たつてただけなのに。

いつの間にかわたしの舌に擦り付けるように動いてるそれは明らかに人間のものになっていた。

ちょっと待つて ！！

これは絶対おかしいよね？

まだまともにキスすらしたことないのに、とか他人の舌の違和感とかを感じてるうちに、ひしひしと危険感が募ってきたわたしは内心願つた。

やめてつ早く、早くどつか行つてよ変態つ ！

なんでこんなことされてるわたし！

夢？！夢なら早く覚めて ！

ルルはどこ行つた？！

鼻先に当たる自分以外の人の息遣いに恐怖を感じはじめたわたしの気持ちが通じたのか、密着してた唇が軽く音を立てて離れていった。

そつと息を吐く変態じみた人間らしきその人の唇が、柔らかくてちよつと気持ち良かつたとか思つてしまつたわたしは末期かもしれない。

「神無。君はこれで僕のものだ」

誰？

澄んだソプラノボイスがわたしの耳元で吐息まじりに囁く。

少女か少年か、まだ区別がつかないその声は妙に艶っぽくて鳥肌が立つた。

身体が鉛のように重たいのは心なしかさつきよりひどくなつてて。

動かしてもピクリとも動かせないのは変わらない。

その人はわたしのぐつたりとした身体を起こしてその胸に抱いた。

キスの次はハグか

ギュッとわたしの身体を抱きしめる腕は、見えないけどなんとなく華奢なイメージがわく。

その人の胸にわたしの耳がピッタリと触れてて、規則正しい鼓動がリズムを刻んで聞こえてきた。

人の温もりはきっと警戒心を和らげる作用があるんだと思つ。

さっきまで感じた不安とか恐怖心とかがすつきり消え去つてしまつた。

眠りにつく前のまどろみにいるかのような感覚がわたしを包む。

夢であつてほしいけど

これが夢ならわたしは欲求不満な変態かも

はつきりしてた意識まで危うくなつてきたわたしが最後に聞いたのは。

「契約成立、だね」

満足げに呟いた美声だった。

4 | 夢と現実の間（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！――！
頑張って脳内ストーリーを文章化させていきます！

「 んん 」

眩しい太陽の光がわたしの目を越して刺激する。

いつも寝起きの悪いわたしが太陽に起られるなんて。

地震があつたって震度4くらいじゃじめに寝起きも最悪なのに。

肌寒く感じたわたしはいつも包まって寝るお気に入りの布団を探して手を動かした。

するとわたしが探し当てるより先にふわりと布団が被される。

ママ ?

由利恵かな ?

ママは明け方にみんなの部屋を回って、お腹出して寝てる子たちの布団を直してくれるし、由利恵は時々一つの間にかわたしのベッドに潜り込んで寝てる時があるから。

布団をかけてくれたのはママと由利恵、どちらの可能性もある。

どうだいひ ?

由利恵かな ?

髪を梳くように撫でる手がせせらべで、せつかく田が覚めたのこまた眠くなってきた。

顔にかかる前髪を纖細な指先が搔き分けてくれる。

露になつたわたしの額に温かくて柔らかくものが押しつけられた。

なんだらつと思ひ手を伸ばしてみると、わたしの指先に覚えのある滑らかな毛が触れた。

「ルル？」

わたしが尋ねてみると、額にあつた温もりが水面を立てて離れていく。

「 そうだよ

頭上から降つてきたルルの声はこつもより低く、はつきりと聞こえた。

この艶やかな声には聞き覚えがあるナビ、こつ聞いたのかはつきりと認めていた。

「 どうで聞いたつけ？」

朝日眩しさを想定してナビと田を開けると、至近距離にあるメジストの瞳とかちあつた。

「 おはよう神無。 具合まだいい？」

アメジストの瞳はそつと纏やかに細められ、その中にほわたしの寝ぼけた顔が映つて見えた。

見慣れているはずのその瞳だなど今日まではいつもと違つ。

瞳を縁取る長い睫毛も、すつきつとおさまつてゐる高こ鼻も、瑞々しく潤う唇も、明らかに猫のものではない。

「

あまりにも整い過ぎて、あまりにも美し過ぎて、もはや同じ生きてる人間とは思えなかつた。

わたしが知つてゐるのは猫のルルであつて、田の前にいる美少女じゃない。

その美少女はわたしより、三つ年下のよう見られる。

丸みを帯びた輪郭と細い頸元は少女をより一層はかなげに、可愛らしく引き立てた。

こんなに近距離から見てもきめ細やかな肌にはシミ一つないし、本当に人間なのか疑わしい。

思わず手を伸ばして恐る恐る美少女の頬に触れてみると。

「おおー・やわらかいー」

その肌はすべすべでモチモチでつとつするモビの手触りだった。

美少女が抵抗しない」とを良いことに、わたしは顔のパーツを一つ一つなぞつてみる。

横に流した前髪で隠れていた眉毛を毛並みに沿つてひと撫でして。ぱつちりとした大きな目を隠すように閉じられた瞼をそつとなぞる。

筋の通つた鼻を通過して、ゆるりと弧を描く唇にたどり着いた。

血色の良い唇は予想以上に柔らかくて指で触れてしまうのが勿体ないと思えた。

「もしかして 天使？」

「天使？まさか」

わたしの記憶にあるこの美少女のような姿をもつ物体は物語で出てくる天使様しかいない。

だけど美少女はクスクスと可笑しそうに笑つて否定する。

わたしはまだ夢の中にでもいるんだろうか。

やけにリアルな夢の中に。

わたしを見つめて愛らしく微笑む美少女は一体。

「ねえ 僕も神無に触れていい？」

ぽけーっと呑呑つぽく口を半開きにしてたわたしに美少女は言った。

サラサラの金髪が美少女の肩から流れ落ちてきて、わたしの視界を金のカーテンで覆つ。

「やつと」

「え？…あつ、ちちちちゅうと！」

すいっと近づいてきた美顔に焦つたわたしは両手を突つ張つて距離をつくつた。

美少女の身体はわたしの腕の長さを分離れた。

あかられまじまじとして息を吐いたわたしに、美少女は眉を寄せてみせる。

女の子同士だからって急に顔を近づけられたら誰だつて焦るよ

「神無。僕に触れられるのは嫌？」

泣きそうに大きな瞳を潤ませて見つめられて答へに困つた。

「いや とかじゃないけど」

「でも今、僕のこと拒絕したよね？」

「そんなつもりじゃなくて…えつと あの „めん、

わたしが悪いことしたみたいになつてるのは不満だけど、先に断り無しに触れたのはこちらだから。

とつあえず謝つとく。

「じめん」

じゃあいい?と首を傾げておねだりするように言つ美少女に、渋々と頷いた。

ありがと、と言つて花が咲くよつてふわりと笑つた美少女に不覚にもトキめいてしまう。

同性で、しかも自分より年下の子にトキめくなんて。

「神無」

そつと自分の胸にあるわたしの手を握ると、そのまま枕に押し付けた。

はい?

美少女の思わぬ行動に目を丸くするわたしを見下ろすアメジストの瞳は、見たものを虜にするような妖しい光を放つていて。

なんか危険だ!と感じた時はもう手遅れで、わたしの瞳は彼女から放せなくなつてた。

ゆっくりと再び近づいてきた美少女はわたしの剥き出しになつた額にキスを落とすと、わたしがしたように目に鼻にと頬になぞつてい

く。

唇で。

「待つてーあの、わたし つ」

女の子とキスしたりする趣味はないのー

と叫びたかったわたしの唇はあっけなく塞がれてしまった。

「——つ！？」

押さえ付けてる手を押し返そうとしたけど、重力もあってかびくともしない。

こんなほつそい腕してゐるのにーーー

必死に押し返そうとしてるわたしをあざ笑うかのよつて、わたしはぴつたりと身体を密着させてきた。

布団があるから直接は触れ合っていないはずなのに、わたしはその近さに恥ずかしくなつてかあつと頬が染まるのを感じる。

真一文字に結んだわたしの唇にやわやわと軽いキスを繰り返してた美少女は、するつと自分の指をわたしの指に絡めて握った。

ただ手を握られただけなのにドキドキが増してわたしはパニック状態。

そんなわたしを知つてか知らずか、美少女は唇を離すと、少しづつ

ずりして、今度は耳たぶを口に含んだ。

「つわーなにしてつー」

初めて『えられる未知な感覚にビクンと反応したわたしを面白がる
よつにわらに音を立てて舐める。

「やめてよ、つー」

ちゅうつと耳元で音を鳴らして離れた唇は、またわたしの唇に戻つ
てきて、さつきより激しく重ねてきた。

「んつ、つー」

緩んできた唇を押し広げて侵入してきた舌の感触にビクリと身体が
反応した。

「デ、『テジヤヴー！ー！ー！

夢と現実の間で起きた出来事が鮮明に思い出されて、わたしの鼓動
は持久走後の「」と、運動量で活動しあじめた。

そうだわたし変態にキスされてハグされる夢、みてたんだ

「これは夢の続き?」

それとも現実?

口内を動く彼女のそれには迷いがなく、自然にわたしのを導くよう
に絡めどる。

カラカラに渴いてた口腔が潤いで満たされていく。

「 つ んぐ 」

鼻に抜けるような呻き声が出てしまって恥ずかしい。

酸素が足りないせいか頭もぼーっとしてくる。

「 はあ 」

「 つは」

わたしにとつて刺激が強すぎるその行為は、美少女の悩ましげなため息と共に終わりを告げた。

今まで男の子と付き合つた経験のないわたしはそれ自体初めてで。だけど全く嫌悪感を抱かなかつたのは彼女のキスが上手かつたからだろうか。

「く 苦しい 」

「 慣れてないんだね。 可愛いよ 」

乱れた呼吸を整えようと口をパクパクさせてるわたしを見下ろすアメジストは、やつをより色が濃く甘い視線を送つてくる。

うあああつー

おおお女の手とキスしちゃった わたしのファーストキス

「 はあっ 、これが夢なら、わたし欲求不満過ぎるよね 」

独り言のよつこつぶやいたわたしに、コシンと額をくつつけた美少女が小さく笑った。

「 欲求不満なのは僕のほうだよ。待てなくて、無理矢理連れて来てしまったんだから 」

「 え。 連れてきた ？」

はたと我に返つて自分の状況を考えて、ほてつた身体から一気に熱が引くのを感じた。

そうこえば、こ じー、ビー ？

今さら過ぎる疑問に答えてくれるのは、わたしを組み敷いてる田の前の美少女だけだろ？

やつぱり夢 ？

現実感のある人肌の感触や、眩しい太陽の光がわたしが作った夢の世界でないことは直感でわかる。

「 じーじー？」

手は固定されたままから動かせる首を使って自分のいる状況を確認しようと試みた。

ベッドは部屋の中央にあるみたいで、大きな窓から見える外の景色と言えば、青い空とずっと先にある山だけだ。

部屋にあるインテリアはアンティーク風で、アイボリー色に統一された落ち着きのある雰囲気で。

わたしが寝ているベッドは大の大人が2人並んでも余裕な程大きい。無駄に広い。

しかも天蓋付きでカーテンにはレースがあしらわれてる。

天蓋付きベッドなんて初めて見た

まさにお姫様の部屋に相応しい！」。

一通り部屋を観察したわたしが再び美少女に視線を戻すと、今度は彼女の格好に目がとまつた。

これはまたオシャレな服を身につけている。

町でこんな服装をしてる人を見かけたら映画の撮影でもしてるのかと思つだらう。

パツと見ただけでもそのブラウスの質が良さそなのは予想できた。

袖口についてるフリルも控えめであつたりしてのにさりげなく手元を華やかに見せてている。

緩められた臙脂色のリボンにはなにやら細かい刺繡が施されていて。

開いたブラウスの胸元から覗く鎖骨が色っぽい。

身につけているシルバーのネックレスは、そのか細い首に似合わず鎖のように太いもの。

きつとフリフリなミニスカを履いてるんだろうなと想像して、それから伸びる華奢な脚を思い浮かべた。

「あれ、スカートじゃない」

ベッドに腰掛け、上半身をわたしに預けてる格好の彼女の足元を見て少しがつかり。

黒いスラックスと焦げ茶色のブーツは案外彼女に似合つていて、美人はなにを身につけても様になるなと感心感心。

「スカートはさすがに履かないよ。男だからね」

「は？」

クスッと笑いを零して美少女は問題発言を投下した。

「ああ、儀式の時は正装として、男でもスカートみたいな仕様の衣装を身につけたりするけど」

「男の子？」

「僕？うん、僕は男だけど？」

わたしの姫耳じゅなけれど田の前の絶世の美少女様は自分の「」を男だと言われた。

「ははっ、うそでしょ？【冗談？】

「嘘なんかじゃないよ。神無は女子とキスする趣味があるの？」

むうとしたような表情を作つても可愛いなあ なんて思つてゐる場合じやない！

「いやいや、ないけど。 そうじやなくて！ それ以前に」

なんだか混乱してうまく言葉が出てこない。

今わたしがいる場所がホームの皿耳じゅないことも、いきなり現れてキスしてきた美少女が実は男の子だったことも、理解する理解しない以前にすべてが謎すぎる。

意味がわからない。

なにが起きてるの？

「うははは！」

貴方は誰？

お決まりの台詞が頭の中で繰り返される。

疑問すら口に出来ないわたしを見兼ねて彼が先に口を開いた。

わたしの狼狽つぶりが顔に出てたのかもしれない。

「あちらの世界に居る時は猫の姿を借りて生活していたんだ。いろいろと都合があつてね この姿が本来の姿だよ」

美少 年はしゃべりながらわたしを抱き起こした。

寝ていたせいか頭がくらくらする。

気持ち悪いし、頭痛もする。

「それでここは僕の自室兼研究室。ミリアス国王城の東塔だよ」

「ミ、リアス ？ 国？ 城 ？」

「 そう 神無の居た世界とは文化も科学の発達速度も違うけど、人間が生存しているということには変わりないから」

安心して大丈夫だよ、と言いながらわたしを抱きしめる腕はやつぱり華奢だった。

安心させるように白魚のような指が優しく髪を梳く。

「そ、そんな急に言われても 」

聞き慣れない単語が美少女、と見せかけた美少年の口から紡がれるけど、わたしの頭にはなかなか入らない。

優しく撫でられたからって理解力が上がるわけでもない。

ザックリと現状説明されたところでへえそりですか、と納得できるわけもなく。

「言葉も、ひやんと云わるよ。日常生活に支障はないから大丈夫」

「いやあ大丈夫って言われても、わたし帰る 帰りたい。こんなところ知らないし」

「神無 申し訳ないけど帰すわけにはいかないんだ」

美少年は形の良い眉をハの字にしてすまなそうに囁つ。

「どうして?」

「 どうして?」

「 なんで?」

「 神無、お願ひだから」

「 」

混乱の中についても冷静に会話できるわたしを褒めてほしい。

だいたい、植物や動物の声が聞こえる自体おかしいことだから。

わたしが普通じゃないことはなんとなく気づいてたし。

仮に、目の前の美少年が元猫のルールシエルだったとしても。

仮に、ここがわたしが知る世界から掛け離れた所だったとしても。

まあ受け入れられないこともない。

許容範囲 だ。

だけどわたしにはわたしの家族がいたわけだし、生活もあったわけだし。

由利恵やママ、ホームの仲間がいたんだよ？

それをなんの断りもなく断ち切つて連れてきたと言つなら、あまりにも思いやりに欠けてると思う。

ひどいよ。

そう考えると慌ててたさつきが嘘みたいに、すんなりと状況が把握できてきた。

徐々に焦りは怒りに変わっていく。

わたしは渾身の力を込めてルールシェルの身体を突き飛ばした。

予想外の衝撃に目を丸くしつつも軽いステップで後方に下がったルールシェルを、ベッドに座つたまま睨み上げた。

動きに合わせて宙を舞う綺麗な金髪も、太陽の光を反射して宝石のように見えるアメジストの瞳にも。

今のわたしなら負けない気がする。

「わたしを 連れてきた理由、帰せない理由、この世界がなんのか、きちんとわかるよ」と正確に教えて

ふらつく脚を踏ん張りせて立ち上がり、無い胸の前で腕を組んで、ほとんど身長の変わらない美少年の双眼を見つめた。

数秒見つめ合った後、譲らないだらうわたしに彼の方が折れたようで、はあっとため息を吐いて格好を崩した。

「解った。君が言つ通つちやんと説明するよ

「当たり前だよ」

わたしがふんと鼻を鳴らすとルール・シエルは困ったように笑う。

「知つて得するやつなことじやなくとも知りたい？」

「知らないほうが良いことってあると思つたが、無知ほど恐いしいものはない」と思つた

「知つたらもう知らなかつた頃には戻れないよ？」

「帰らせる気がないなら同じなんじゃない? 十分巻き込まれてるんだから

ルール・シエルはわたしの強気な態度に苦笑を漏らして、そうだね、と小さく首を縦に振つた。

「それじゃあ一から話そつか。 でもそれは神無の体力が回復して

からだよ

わたしの体力?と首を傾げると、頷いたルールシェルは驚くべき事実を言った。

「慣れない空間魔法を使つたせいで影響を受けた神無は、丸々3日間飲まず食わずに眠つていたんだ」

どうりで頭がクラクラするし脚がフラフラするわけだ。

脱水気味でかつ低血糖になつてゐなう仕方ないとではある。

それにしても 魔法、とはなんですか ?

意識しだすと今までそれほど強く感じてなかつた空腹感や倦怠感が一気に襲つてくる。

「そりいえば お腹すいた。喉も渴いたし怠いし頭痛いし

「朝食を用意させよう。なにが食べたい?頭痛も軽くなるように処置するよ」

「なんか軽いものが食べたい。クロワッサン。ココア飲みたい。あ、プリン食べたい。あと お風呂入りたい」

わたしあぐきゅるむると皿と主張するお腹を両手でおさえた。

凶々しくも要求するわたしに微笑んだルールシェルは、徐に膝を折りわたしの左手を恭しく取ると上目遣いで見上げてきた。

突然なんだろ？、と思つて見下ろす。

と、ルールシェルはわたしと田を合わせたままあらう事か指の先にキスを落としてきた。

「 つ、

15年間生活してきてこんなことをされたのはもちろん初めてだし、これほどキザな仕草が似合つてしまふ人に出会つたのも初めて。

「 我が愛しき姫の仰せのままに 」

田の前の美少年の口からなら、姫、なんて単語が出てきても違和感がない。

まさかとは思つたけど、姫つてわたしのことと言つてるの？

一連の動作に瞳を奪われていたわたしがポーッとほうけてる今も、文句の付け所がない笑顔を浮かべているルールシェルは、どこからどう見ても貴公子そのものだ。

「 順序を違えてしまつたけど、改めて 。私は王家直属の魔導師団団長を務める、ルールシェル・シユナイザー。我が権限をもつて貴女を招喚させていただいた。歓迎する」

よつゝや、ミコアス王国へ

6_新しい世界で（1）

ルールシェルに連れてこられたはやく日が過ぎた。

まだ詳しくはなにも聞いてない。

尋ねようとしても上手くかわされて駄目だつた。

美味しいご飯をいただきて、とりあえず休めと言われて寝かされている。

食物は元の世界とほとんど同じような形をしてたし、料理の味は少し薄めだけど塩分摂取量が多い日本人にはちょうどいい。

それぞれの名前は違うけど、パンも米のような穀物も野菜もある。どうやら豚肉は食べないみたいだけど、わたしは鶏肉派だから問題ない。

横になつてれば眠れちゃつから楽には楽だけど、いたつて健康体なわたしさそりそろ飽きてきた。

それがあちらの世界にいるだらつ由利恵やママ、わたしの植物たちが心配になつてきた。

聞きたいこともたくさんあるし

わたしは、よつこりせと歳に似つかわしくない掛け声と共にベッドから起き上がつた。

「の2田間はルールシェルの部屋から一步も外へ出でていのだ。

部屋にトイレもお風呂も付いてるから外に出る必要がないと言つたが、出でてもいいえないと云つた。

食事はメイドさんとおぼしき人が運んできてくれる。

わたし用に部屋着とネグリジェを用意してくれた。

部屋の掃除は1日1回あって、その時はルールシェルの研究室で待機するんだ。

研究室は部屋の奥にある扉の向こうにあって、果てしなく続く螺旋階段を下つた先にある。

ルールシェルに聞くところの部屋は4階にあるらしく、5階分の高さと距離を螺旋階段で上り下りするのだ。

地下の研究室は思いの外快適な空間で、まだ2回しかお邪魔してないけど結構気に入ってる。

四方の壁を隠すような背の高い棚にびっしりと並べられた本は、国語辞典のように分厚いもので見るだけで読む気がそがれそう。

瓶やら乾燥した薬草やら得体の知れない物体が押し込まれてる棚には興味をそられた。

きらきらと光る石もあるけど、ホルマリン漬けにされてる生き物もいて、その用途に若干恐怖を感じる。

ルールシェルの広いデスクにはなにやら細かい文字で埋まつた書類や、怪しげな色の液体が入つた瓶が散乱していた。

ものによつては黒い煙りが漏れてるのだから大丈夫なのかと聞きたい。

壁は大理石のようなものでできつていて、リンヤリとしていた。

部屋の中央に描かれているのが所謂、魔法陣つてやつなんだそうだ。大きな円形の中にも角形が描かれていて、解読不可能なアラビア文字のような字が隙間なく書き込まれている。

線が多すぎになにを意味して描かれてるのかまつたくわからない。

研究室で仕事をするルールシェルの横顔は、ひどく真剣なもので安易に話し掛けられない雰囲気を醸し出していた。

だからわたしは部屋の隅にあるふかふかなソファーに座つて室内を観察するか、ルールシェルが持つてきてくれた絵本を読んでるくらいしかやることがない。

それでも1人ベッドで「ロロ」「ロロ」してるのは楽しいから、足がパンパンになるの覚悟でルールシェルの研究室にでも遊びに行くか、と思い立つたところだ。

「もうあつちを離れて6日目だし 色々と知らなくちゃなあ 」

よくよく考えると恥ずかしいことばかりしてきたと思つ。

食事の時はわたしの箸を使って食べさせてあげてたし、お風呂も一緒に入ったことがある。

そういえばあの時だいぶ暴れてたな。

結構一緒に寝ることもあって、顔や手を舐められたりもした。

じゃれて遊んだこともあったし

「わあああっ！…！」

思い出せば思ひ出すほど恥ずかしい。

穴があつたら入りたいとはまさしくのことだ。

猫のルルと過ごした生活をすべて金髪美少年に置き換えてみると、もひじりとしてはいられないほど恥ずかし過ぎる。

「うわーっうわーっ最悪だーっ！」

ベッドの上でのたうちまわるわたしの姿を見た人が、どんなことを思うかなんて知ったことではない。

ふわふわな枕を手に取りぎゅうっと顔を埋めて羞恥心を抑え込んでると、背後からクスクスと笑う声が聞こえてきた。

カバツと振り返ると、そこには畠田麗しいルールシェルがトレイを持つて立っていた。

どこから見られてた？！

一人過去の醜態を思い返して悶えていた、なんて知られたくない。

かあつと赤くなつた頬を隠すかのようにルールシェルを睨む。

「こんにちは、神無。どうしたの？なんだか落ち着きないね。美味しいケーキがあるよ、お茶にしよう」

わたしのジトリとした視線など気に留めない美少年は、爽やかな笑みを浮かべて近づいてくる。

紅茶の香とお皿の上に乗つたロールケーキがわたしの意識を簡単に奪つた。

「ケーキ っ」

抱き抱えてた枕をぽいつと投げ捨てるわたしを見ながら、ルールシェルは実に優雅な足取りでテーブルまでトレイを運ぶ。

今日のルールシェルは襟が大きく開いた白いトップスに紺色のスラックスを履いている。

高いところでの1つに結わいた長い髪は、彼が歩く度にサラリと揺れてすゞしく綺麗。

ルールシェルのストレートな髪を見ると由利恵を思い出す。

由利恵も羨ましいくらい真っすぐな髪質をしていたから。

もつ余えないかもしれません。もしかして、やつは脳が急に苦しくなる。

由利恵

「うつむけで、神無。君が好きなイチゴも付けてあるよ」
テーブルの上にティーセットを用意したルールシェルの傍まで行く
と、細い腕が伸びてきて神無を言わざず捕らえられてしまった。

「ちよつ、こきなつだしたの？」

「さやかな抵抗をみせるわたしを両腕で抱え込んだルールシェルは、
悲しそうな目でわたしを見る。

「神無がすく寂しそうな表情をしたから」

「わ、わたしそんな顔してた？ ね、ねえ、ルルって年いくつ？ わ
たしより年下でしょ。なんか歳に合わない喋り方だよね。前々から
思つてたんだけど」

近距離にある美々しい顔に、まじめにした心を落ち着けるためにわざ
と話を逸らしてみた。

身長が同じくらいだから本当に顔が近い。

「うん。年は13だよ。神無より2つ年下かな」

「13？！ 中1じゃん。なんか悪いことじてるみたい」

「悪いこと？」

年齢を聞いてびっくり。

年下かな？って予想はしてたけど。

13歳、中1と言つたらまだ外で駆け回りたいお年頃だひつ。授業中に消しゴムのカスを飛ばしたり、友達のノートに悪戯書きをしたり。

ルールシエルが校内で鬼ごっこする様子なんて想像もつかない。

しないんだろうな。

醸し出す雰囲気と実年齢がこれほど合わない人なんてそういうな
いと思う。

「ねえ、」

「え？ あ、えっと、」

抱き寄せてただけのルールシエルの手が背中を撫でて腰の位置で止
まつた。

腰なんて異性に触られたことがないからそれだけでビクつとしてし
まつ。

ぎゅっと引き寄せられて身体がくつつきそうになつたので、ルール
シエルの胸に両手を添えてからつじて密着を避けた。

明らかにただのハグではない。

飛んでた思考を田の前の美少年に戻すと、可愛らしく小首を傾げて尋ねてくる。

「悪い」とつて?」

「いや、だからね。ルルまだ子供だしょ?わたしも子供だけだ。ほら、この通りとせ良くなこつて言つか?犯罪ばこつて言つか?」

「同意の元なら問題ないよ。僕のことは『気にしないで良いから』

いやね、わたし同意した覚えないんだけども

腰を引き寄せてる手とは反対の手でそつと髪を梳かれる。

耳の後ろ辺りから髪の中に指を差し入れられるとゾクッと背筋が粟立つた。

「 へ、」

「僕はこじして神無に触れていると心地好いよ。もつ離したくない
くらこだ ずっとこじていたい。 神無は?」

ちょっと話題を逸らせるつもりだったのに、余計に可笑しな方向に向かつて進んでしまつてゐる。

こんな時どんなふうに返事をしたら良いかなんてわからない。

あーとか、うーなどと声を漏らして時間を稼いでみるけど良い返答

は一向に浮かばない。

浮かばないどころか、ドキドキが大きくなってきて頭が真っ白になりそうだ。

顔を少し上に向けられ、あと少し距離が縮めばお互いの唇が触れてしまいそう。

ルールシェルの視線がわたしの唇に移るのがわかつてビクンとした。

わあああ、ビクン

一度キスしたからって2回目からは緊張しない、なんてことはない。

そもそも最初のは不意打ちであり、ルールシェルが男の子だって知らなかつたから油断してたわけであり。

今の若者がどういう思考でキスするかなんて知らないけど、わたしは好きな人とするものだと思うから。

挨拶やハイタッチー・ション感覚でしてほしくない。

「あ、あ、あのねルル！トモダチ同士でこんな風に抱き合つとかつて、あんまりないと思うんだよね」

「友達？」

「や、やつーわたし達、トモダチ、でしょつ？」

「

ルールシェルの綺麗な顔が無表情になつていいくのが本氣で怖くて声が震える。

「あ、ルールシェル？」

鋭くなつた視線はわたし自身に向けられてゐるのではないと直感でわかつた。

だけど二日間、笑顔しか見せなかつたルールシェルが無表情になると、さつきとは違つた意味で心臓がドキリと動く。

怖い。

ルールシェルの胸にあるわたしの手の平がじつと汗で濡れるのを感じた。

「神無にとつて僕はただの友達なの？」

冷ややかな声色はわたしの瞳に涙を溜めさせるには十分過ぎる効果を發揮した。

彼が纏つオーラまで水が凍りそつたほど冷たい。

急に機嫌が悪くなつた理由を理解できないわたしは黙つたまま上田遣いでルールシェルを見つめた。

暴言を投げられたわけでもないのに泣きそつた自分が惨めだ。

瞬きも出来ず見つめるわたしと、わたしを見据えるルールシェルの瞳が交差することもの数秒。

わたしにとつて非常に苦しい沈黙を破ったのは、部屋のドアを打ち破る勢いで室内になだれ込んできた大量の紙の山だった。

7 「新しい世界で（2）

「やあやあ、我等が麗しき団長殿！有給休暇いかがお過いしかな？」

バサバサと洋紙が散らばる室内に無遠慮に入ってきた男の登場に、ルールシェルはあからさまに不機嫌そうな顔をした。

さつきまでの感情の籠らない表情よりはまだ良いけど、悪い状況には変わりない。

第三者の訪問に溜息をつきたい気持ちをぐっと我慢した。

「ダネル、なんの用？僕の休暇はあと4日あるはずだけど」

ルールシェルは振り向きもせず答える。

「いやあ予想外に仕事が多くてさ、私一人じゃ捌けなくてね？手伝つてもらおうと思って持つてきたんだよ、仕事！さあさあ一緒にやるつじやないか！」

場の空気を読めない男の人の明るい口調に、ピクリと反応したルールシェルはふつと短い溜息を吐いた。

そつと壊れ物を扱うよつな手つきでわたしの頬を優しく撫でる。

「この話は保留だね。また今度、ゆっくり時間が取れるときに2人だけでしょう」

いいえもうこの話は結構です、とはさすがに言つ興味が持てなかつ

たわたしは無言のまま頷いた。

わたしを見つめていたルールシエルの目元が、ふわりと緩んだのがわかつてほつと肩の力が抜けた。

「おやー？ おやおやおやおやつー？」

散らかした洋紙をいそいそと集めていた男の人の注意がわたしたちに向いたようだ。

わたしを背に隠すようにして男の人に振り返ったルールシエルは、冷たい口調で言い放つ。

「仕事は手伝う。部屋からは出ていってくれ」

「いやー珍しいこともあるもんだね！ 仕事が恋人の冷徹王子様が有給とつてまで部屋に引きこもつてなにをしてるのかと思えば つ」

一息にしゃべった男の人はルールシエルの言葉を聞くどころか、床に散らばる紙をクシャリと踏み付けながらこちらにやってきたようだ。

残念ながら、ルールシエルの背中とベッドの天蓋が邪魔して、男の人の顔は見えない。

「ルル、王子様とか言われてるの？ 仕事が恋人 ？」

「。。。ダネル」

「水臭いじゃないか！ 私と君の仲だろ？ 意中の人人がいるなら教え

「でも良いじゃないか？」

明るい調子で興味に満ちた声を発する男の人が気になつて、ひょこつとルールシェルの肩から覗いてみた。

長い脚がチラリと見える。

「ダネル、それ以上近づかなくて良いから」

「そんなつれない」と言つてないで！君も隠に置けないなあ！紹介してよ！」

「お前だけには紹介したくない」

「なんですかー？」

「お前の田に曝したら彼女が汚れる」

「え？そこまで言つて…そこまで言つちやうひ？…」

「言われるようなことをしてきただろ？」

「いやいやいやー君に言われたくないよ！」

仲良しなのか、そうじゃないのか。

言い合いを始めた2人から田を離したわたしは、今だに元田を舞つ薄っぺらい洋紙を眺めた。

なんで浮かんでるんだろう？

「ルル、紙が浮いてるよ、なんですか？」

「あ、あ。邪魔だね」

ルールシエルの袖を引っ張って聞いてみる。

「今抜けさせるから」

同時に同時にふわふわと浮かんでた洋紙が一斉に床に落ちた。

「わっ！」

「おお、さすが！ 私移動魔法は苦手なんだよー。風が吹いてくれなくてさつさつと拾つて」

「これが魔法つてやつなのか。

確かに入ってきたときも尋常じゃない勢いだったもんね。

ドアが破れるかと思つたくらい。

「あの、はじめまして、こんばんは！」

ルールシエルの背中に隠れて黙つたままでこるのも窮屈だったので、

一応当たり障りのない挨拶をしてみる。

相手の顔が見えない状態での挨拶は無意味に思えたけど、仕方ない。

「おおっ！私に話かけてくれてるんだね？！ルールシエル君、どうでくれないかな？私もレディに挨拶がしたいよ！」

ルールシエルは上機嫌な男の人に向かつて盛大な溜息をついた。

すっと横に避けてわたしの隣に並ぶ。

肩に腕を回す理由はあえて聞かない。

少し離れたところに立っていたのは、ルールシエルまでとは言えないながらも、端麗な顔立ちをした青年だった。

顎のラインで切り揃えられた艶やかな黒髪に好奇心を隠さない茶色い瞳。

かっちりと着こなした黒い団服は細身な身体にフィットしていくよく似合っている。

能天氣そうな話し方と不釣り合いなその容姿にわたしは目をしばたかせた。

「挨拶はそこから一步も動かないでしてくれ。これ以上近づかれて彼女に変な病気が移つたら困る」

「病気つて ルル それはちょっとひどい言い方だと思つよ？」

「なんと可愛らしいレディだ！私を庇ってくれるんだねっ」

律儀にもその人はその場から動かずわたしに向かって話し掛ける。

「はじめまして、私の名はダネル・ルクス。王家直属魔導師団の副団長を務めているよ。よろしくね、可憐なレディ」

自分の左胸に手を当てて腰を折る姿は様になつていて、思わず感嘆の溜息が漏れた。

ルールシエルと同じようにストレートな黒髪が、はらりと一束顔にかかるのを搔き上げる仕種は大人の色気を醸し出している。

「レディ、貴女のお名前を伺つても？」

「え？あ、はい！わたしは神無つ！　てあります」

うつかり見惚れてて。

声が裏返つてしまつたのが恥ずかしくて視線を逸らせると、男の人にくツクツと笑われてしまつた。

「カンナちゃん、ね。よろしく。私のことはダネルと呼んでくれると嬉しいなっ」

語尾に星マークが付きそうな話し方はちょっと残念だけど、副団長を任されてるあたりから悪い人ではないんだと思つた。

挨拶が終わつてもじいとダネルさんを観察してると、ぐいと肩を引かれて身体がよろめいた。

「神無」

「わわわつなにつ？」

「ほーう! これはこれは」

「何で？」と聞いたの？

ルールシエルの腕の中に閉じ込められたわたしが抗議の声を上げると、ダネルさんが感心したよう頷いた。

あんまり他の男を見つめちゃ駄目だよ。
僕が耐えられないから」

た
耐えられなしにて

至近距離でウルウルな瞳を見せられてたじろぐわたしに、興味津々といった視線を送つてくるダネルさん。

「見たところ既に契約も交わしてゐようだし、そんな神経質になる必要ないんぢやないかなあ～？」

その言葉に引っ掛かりを覚えて、ん？と首を傾げる。

「契約つて
？」

ダネルさんの登場にすっかり失念していた。

今日もまたこのと闇を出でて思つてはいたんだつた。

「ルル、そろそろ聞いてもいいかな？」

控えめに問い合わせてみると、ルールシェルはわかつていたかのよう
に頷く。

「約束通り、質問に答えるよ」

「えー？ なに、連れ込んだいてなにも教えてあげてないの？ ？」

ダネルさんが大袈裟な言い方で口を挟んだ。

「空間魔法で連れて來たから、本人の体力が回復するまで待つて
もらつてたんだよ。疲れてるときに聞いても頭に入らないよね？」

確かに、と頷くわたしを見ていたダネルさんは、ふーんと言つて渋
い顔をする。

「空間魔法、か。この1年半くらいちょくちょく姿を消してるのは
は知つてたけど なるほど。異世界にまで探しに行つてたんだね」

さつきまでの軽い調子ではなくなんだか深刻な話し方だ。

「そういえば、猫のルールシェルと出合つたのは確か1年前くらい。

「そう、運良く見つけられたんだ 彼女を」

そんな前からわたしを？

探すつてなに ？

「それで？契約したら解けたの？」

「いや」「

わたしは知らない事情を話す2人を交互に見た。

わたしが関係してる内容なんだろうけど、全く話の筋が掴めない。

「まだ覚醒してないってこと？」

「 だろ？ まだ歳も16に満たない」

「 せうだよねえ。12、3歳ってところならまだ無理だよね」

「 12、3？ わたし今年で16になりますけど

「 とにかく。今日は神無に色々とこの世界について教えたいたんだ。
仕事は夜してくれ」

「 それなら仕方ない。隣の部屋借りるから」

「 わかった。書類は僕が移動させるからそのまま良い。それから

「

会話に参加できないわたしは、テーブルに置かれたままのロールケーキと同じ気分だ。

紅茶は冷めきつてゐるだろ？

契約とか魔法とか覚醒とか、知らないことばかりで頭が痛くなりそ

う。

今日はどうしても知りたくない」とだけ聞いて終わりにしよ。

わたしは2人から離れてソファーに腰掛けた。

目の前には冷たくなった紅茶と表面が若干パサついたロールケーキがいる。

食べて良いかと聞こうと思つて顔を上げると、同じタイミングで振り返ったルールシェルとバッヂリ目が合つた。

「神無、研究室に行つてくるからちょっと待つてね？あ、ケーキは食べていいよ。紅茶は僕が入れ直すから飲まないでいて」

「はーい」

まのびした返事をするわたしにニコリと微笑んだルールシェルは、ダネルさんとボソボソと会話した後部屋の奥へと消えていった。

「いただきまーす 」

可愛らしいデザート用のフォークでイチゴをツプツプと刺し口に運んだ。

普通のイチゴより小ぶりなそれは、甘くて、瑞々しくて、すくすくおいしい。

「んーつ甘い！」

思わずニヤけてしまつ。

好物のイチゴに氣を取られてたわたしは、ダネルさんが近づいて来るので氣がつかなかつた。

「甘いー？ カンナちゃんは美味しいのに食べるねえ」

ソファーを揺らさないよにゆつくつと腰掛けたダネルさんはわたしの顔を覗き込んだ。

「え？ あ、甘い、ですね」

「ふーん。カンナちゃんは甘い物好きなんだー」

お互いの太股がピッタリとくつづくような距離に座られて落ち着かない

わたしを見てニゴニゴと笑うダネルさんはお皿に乗つてゐるイチゴを長い指で摘み取つた。

食べるのかな？と思つて見ていると、ダネルさんは持つたイチゴをわたしの口元に近づけてきた。

「はい、あーんして？」

「え？ ー？」

自分で食べるわけじゃなくてわたしに食べさせるつもりだったの？

笑顔を崩さず戸惑つわたしにイチゴを突き付けるダネルさん。

「えっとわたし自分で食べられますけど」

「いいからいいからっ！ほら、イチゴが待ってるよ？あーんしてっ

完全に子供扱いされてる

遠回しな拒否をかわされて渋々口を開くとすかさずイチゴが投入された。

1

モグモグと咀嚼するわたしを近距離で眺めていたダネルさんは、満足したのかにつり笑つて頭を撫でてきた。

彫りの深いダネルさんの顔は近くで見るとエキゾチックで。

ル・ル・シエルといし、タネルさんといし、男の人なのにしてこんなに綺麗な顔をしてるんだろ

ほんせりとそんなことを考えるとふしにタネルさんかわたしの髪に指を添えた。

?

わたしが持つてゐるケーキ皿を受けとつてテーブルに置く。

「ダネルさん？」

「君には絶対に手を出すなってルールシエル君から言われたんだよね。でもさ、私って性格悪いから」

ぐこつと顎を上げさせられダネルさんの顔が近づいてきた。

「…」

反射的にぐこつと顎を開じると耳元に生暖かい息が吹き掛けられる。

「もう言わると逆効果なんだよね 君、すぐ可愛く見えた
田中子供じゃないみたいだし、ね」

「…」

耳元で囁かれるテノールの声にぐわわわと鳥肌が立つ。

ダネルさんの、あまりの豹変ぶりに反応できない

「なーんてねつ…」

「はえ？」

ぱっと身体を離したダネルさんはおどけた風に笑った。

「冗談だよつ！確かにカソナちゃんは可愛いけどー。私は童女趣味じゃないんだよね、残念ながら…」

あははつと顎を上げて笑うダネルさんを見て、ほつと胸を撫で下ろした。

「びっくりした ダネルさんからかわないでください……」

「ドキドキと脈打つ心臓を鎮めるように手を胸に当てる。

ルールシェルの中性的な美貌とはまた違う独特な雰囲気のダネルさんには、ちょっとだけ魅力を感じたなんて絶対言わない！

わたしは苦し紛れにお皿を手に取つてロールケーキを豪快に食べた。

「なになにー？ルールシェル君がいるのに私にドキドキしちゃつた？カンナちゃんつてば浮氣者ー！」

ニヤニヤと含み笑いを浮かべるダネルさんはわたしの中でも要注意人物に決定した。

安易に近づかないことにしょー。

「そんなんじやありませんからー！」

ふいつと顔を背けるわたしを見てふふっと笑つたダネルさんは、よいじょっと言つて立ち上がつた。

「それじゃあ私は彼が戻つて来る前に御暇しようかなー。じゃあね、カンナちゃん！」

ダネルさんは、ラブラブしたことは内緒だよーと口元に人差し指を立てて首を傾げた。

誰が言うか！

「 セヨナリフ 」

ぶつきらばうな挨拶をするわたしに手を振つて、颯爽とした足取りで帰つていくダネルさん。

完全に遊ばれた

どつと押し寄せる疲れを感じてソファーの背もたれに身体を預けると、ちよびじょくルールシェルが研究室から戻ってきた。

もつちよつと早く来てくれれば良かつたのに

ルールシェルはわたしの恨めしげな視線に気づいたようで、隣に腰を下ろすとどうしたの?と尋ねてきた。

「 別に 」

ルールシェルの方を見ないでロールケーキに集中するわたしを暫く眺めていた彼は、思い出したかの用に散らかった部屋に視線を移した。

「 まつたく、散らかすだけ散らかして 。突然で驚いたよね?ダネルはああいう奴なんだ」

ルールシェルがパチンと指を鳴らすと、散乱してた紙の山が一瞬で消えた。

「 おおつー 」

驚いて目を丸くするわたしに向かつて小さく微笑んだルールシェル

は、冷めてしまった紅茶のポットに手を添えた。

「コポコポと音を立てたかと思つと、ポットの先から白い湯気が一筋天井に向かつて伸びていく。

「僕は精靈とも契約をしてるから、こんな風に簡単に魔法が使えるんだよ。本来なら魔法を使つためには言靈が必要になるんだ」

「へえ なんか凄すぎてよくわからないや」

正直な感想を述べると、ルールシェルはクスクスと笑つてわたしの頭を撫でた。

「ゆつくつと受け入れてくれたらしいよ。神無の世界じゃ馴染みのないことだもんね、魔法とかつて」

「うん、」

ルールシェルは頷くわたしを抱き寄せる、猫がそつする様にスリスリとほお擦りをした。

「もうルル、恥ずかしいから」

小さく抵抗するわたしの意見を無視したままぎゅうっと抱きしめるルールシェルの腕に安心感を覚えたのは何故だらう。

知らないことだらけの世界で頼れるのはルールシェルしかいない、そんな風に思うのはちょっとだけ心細いせいなのかもしれない

8 新しい世界で（3）

「はあああーーー」

深いため息が無意識に出た。

もうすっかり田が沈んで、わたしが知るお月様より何倍も大きいこ
っちは月が顔を出した頃。

約束通り半日かけてわたしにこっちの常識を教えてくれてたルール
シエルは、ただ今入浴中だ。

豪華な夕食を2人で食べて、先にお湯をもらつたわたしはリラック
スタイル。

のはずだけど

色々と新しい単語を聞かされて頭がパンク寸前でどうしようもない。

リラックスするどころか、聞いた単語を整理するのに必死だ。

とりあえず絶対に知りたいことを聞けたわたしはそれだけで満足だ
ったんだけど。

親切なルールシエルは時間が許す限り永遠とこっちの事情を話して
くれた。

途中で集中が切れたわたしが適当に返事してるので気づきながらも、
丁寧に説明してくれるルールシエルは中学の数学教師を思い出させ

た。

黒板に細かく式を書いていっては、何回もゆっくりと公式を解説してくれたものだ。

ルールシェルは教師なんかも向いてるだらうなーなんて思つてたわたしは、すでに現実逃避真っ最中だつたんだと思つ。

昼間絶妙なタイミングで現れたダネルさんと飛び回る紙つペラにも、大して驚かなかつたわたしを自画自賛したものだけど。

それは実は驚かなかつたんじやなくて、驚けなかつたんだと、今さら気づいた。

自分で思つてたほどわたしは図太くできてなかつたんだ。

人つて驚きが大きすぎると反応できなくなるものなんだと新たな事実を発見。

そんな中で理解したのは、こっちでのわたしの立場と、あっちの世界の様子、それからルールシェルの大まかな生い立ちくらい。

わたしはこの城で、ルールシェルの、契約者、として扱われるそうだ。

魔導師は大きく分けて、攻撃魔法が得意な黒の魔導師と、防御魔法が得意な白の魔導師が存在する。

実力がある上層部の魔導師は攻撃魔法も防御魔法も使いこなせるそつだけど、やっぱり向き不向きがあつて、根本的にはどちらかに偏

つてしまつてゐらしい。

だからそれを補うために、自分とは対極の能力をもつ魔導師か、それと同等の力をもつ人を探して契約を交わすそうだ。

上級の魔導師となると、国の重要機関に携わることになるみたいで、己の魔力の維持と安定のためには契約者が必要不可欠になるらしい。

契約するには、2人の相性も関係していくらしく、面倒な話だと思う。

ルールシエルが言つには、わたしと彼の魔力の質は相性が良いらしい。

他国との権力争いはもちろん、国内でもいろんな派閥があつて、一度上層部に入つてしまつとなかなか平和に過ごせなくなると言つていた。

契約しているのとしていないのだと大差があるらしきけど、わたしにはよくわからない。

契約を交わすには膨大な術式と契約を受ける側の生き血が必要になつてくるそつで。

2つの要素が揃つて初めて契約成立に至るといつわけだ。

夢と現実をさ迷つてたわたしに噛み付いてきたルールシエルの意図がやつとわかつた。

最初から説明してくれればよかつたのに、と言いそうになつたけど、よく考えたらあの状態でこんな話しされても、素直に受け入れられるわけなかつただろうなと思い直した。

ちなみにルールシエルは黒の魔術に長けてると書いてたから、わたしには白の魔術なる能力があるみたいなんだけど。

全然そんなの感じないし、言われたところで直覚もできない。

と言うのも、魔術の元になる魔力は潜在的な能力で、だいたい16歳を過ぎたくらいに開花するらしいから。

今はほんの少し滲み出る程度の魔力しか放出しないそうで。

まだわたしの力は眠つたままなのだとルールシエルは言つていた。

なういうじてこの時期に連れて來たんだね?

そんな疑問も浮かんできた。

たぶんそれには深い訳があるんだろうけど、ルールシエルは言葉を濁してはつきりとは言つてくれなかつた。

次にあつちの世界の様子だけど。

どうやらわたしは存在自体が忘れられてしまつたみたいだ。

正確に言つと、わたしがいなくなつて騒ぎにならないよう、ルルシエルが魔法で記憶を操作したらしい。

ママや由利恵や、ホームのみんなの記憶を。

突然姿をくらまして心配かけるのは嫌だけど、存在を忘れられるのも嫌だ。

でも実際、わたしの生きる世界はすぐ狭いものだった。

わたし一人が世界から消えたとしても、困る人なんていないだろ？
と思うと、ちょっとだけ虚しい。

わたしの帰る場所はあそこしかなかつたのに

そつは言つても後の祭りで、もつゞいにもならない。

あつちといつちの世界を繋ぐ空間魔法は発動させるのに相当時間がかかるらしく。

特に人を通過させるのは至難の技で、ルールシエルは1年かけて準備した末、今回の魔法を成功させたと言つていた。

だから帰れるとしても、1年後。

その間わたしはこつちで生活しなくてはいけない。

ため息以外に反応しようがなかつた。

こつちの言葉が解るのは、ルールシエルの魔法のおかげみたい。

文字は書けないけどなんとかなりそうだし。

胸にぽつかり穴が開いたような喪失感は簡単には消せないけど、1年待てばまたあっちの世界に帰してくれるつてルールシエルと約束した。

その時にはみんなの記憶を戻すとも約束してくれた。

だから今はルールシエルの、契約者として、彼の力になれるように努力しようと思う。

平凡で、特に取り柄のないわたしを、本当に必要としてくれてるようだから

パタンとバスルームのドアが閉まる音が聞こえて、ルールシエルがお風呂から上がってくるのがわかつた。

わたしは座っていたベッドから立ち上がり、大きな月が見える場所にあるソファーに移動する。

少し開いた窓から入り込む夜風が心地好い。

大きな月が世界で独りぼっちなわたしを見守ってくれてるみたいに感じた。

「神無、寒くない？」

少しだけソファーアを軋ませて隣に座ったルールシエルは、白いバスローブを着ている。

やけにバスローブが似合つ彼だ。

濡れたままの髪は無造作に束ねられていた。

「寒くないよ。ルル」そ、ちゃんと髪乾かさなくちゃ」

「自然に乾くよ」

美少女に見紛うルールシェルだけど、髪の毛を劣らないとかその辺はやっぱり男の子みたい。

みたい、といふか正真正銘男の子なんだけどね。

5年も経てば超絶美男子になるにちがいない。

「神無、今何を考えてる？」

顔を覗き込むようにしてじっと見つめてくるルールシェルは、なんだか心細げな瞳をしていた。

「ルルが大人になつたら超絶美男子になるだろくなつて」

「それだけ？」

「うん」

まさか、あっちの世界のと似てる男を見て安心してた、なんて恥ずかしい」と言えない。

わたしはルールシェルから視線を逸らし、また男を見上げた。

「大きい用だね あっちの世界より何倍も大っ！」

しゃべりかけたわたしの唇か、ルールシェルの唇で塞がれた。

突然過ぎて固まるわたしが反応する前に、強い力で抱きしめられる。

「つ、モーツルル！…」

即座に非難の声を上げると、ルールシェルはわたしを落ち着かせるように優しく頭を撫でてきた。

今日はよく撫で回される

頭ナデナデされたからって機嫌が良くなるような年齢じゃないのに
つ！

「あ、あのぞ、ルル。こうゆうスキンシップってこっちの文化な
かもしけないけど。あんまり、キス、とかしないでほしいんだよ
ね、」

密着したまま抗議するわたしの髪を梳いていたルールシェルの手が
ピタリと止まつた。

ちゃんと文化の違いは理解し合わないよね！

わたしはこんなにキスされる文化で育つてきていなし つ

「僕は 言葉で感情を表すのが苦手なんだ。だからこうして 態
度で示してるんだよ？」

「た、態度でつて？」

「強く抱きしめて、キスをして、僕にとつて君がどれほど大切な
か 伝えてるつもりだけど、」

わかるかな?と耳元で囁かれて背筋がゾクッとした。

トーンを下げるルールシェルの声は直接脳に響くようで、心臓にも
悪い。

「わかつた、わかつたからーちょっと離れてもらえる?！」

恥ずかしい台詞もルールシェルの口からなら違和感なくスラスラと
紡がれる。

笑い飛ばしたくても笑う」とすらできない。

「本当にわかつてる?」

「わ、わかつてるよ?」

「じゃあ僕が神無に触れる」とは許されるよね? わかつてるなら

「え?
うん」

完全に嵌められたと気づいた時にはすでに遅し。

うまくルールシェルに丸め込まれてしまつた

目尻を下げて見つめてくるルールシェルの笑顔が、すこく黒く見え

たのは錯覚だったと思いたい。

「神無が望むなら僕はなんでも出来るよ。僕のすべては神無のもの。
だから ね？」

「え? ゴメン、なに?」

「ううん? 寂しくなつたらこつでも呴うんだよ? 僕は隣の部
屋にいるから」

最後の方が聞き取れなくて聞き返したけど、ルールシェルは答えて
くれなかつた。

その代わりにか、わたしの額に小さな口付けを落とす。

「先にお休み、神無。明日から神無に専属の侍女を付けるから、そ
のつもりでいて」

「え? う、うん。おやすみ」

さつきから、え?とかうん、とかそんな返事しかできてない。

ルールシェルにとつてボディータッチは会話と同じことなんだ
ううか?

それじゃあ他の人とも、こんな風に触れ合つてゐるの?

満足そうな笑みを残して部屋を出て行つたとする、ルールシェルの
背中を眺めつゝ思つた。

「まあ ルルは13歳で子供だし 別に問題ない、のかな?」

わたしはチクリと針で刺されたような痛みを胸に感じたけど、気付かないふりをして再び淡い光を放つ巨大な月を見上げた。

8_新しい世界で（ω）（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます m(—)m

9 「居場所（1）

暖かい温もりに包まれて目が覚めた。

このところの目覚めが頗る良い。

こっちの世界に来たばかりの時は身体が急かつたけど、それが良くなつてからは逆に全身が軽くなつたようにさえ感じる。

車もないし、電車もないし、空気が綺麗だからかな？

うつすらと開いた目に、カーテンに仕切られて光の入らない薄暗い部屋の天井が映つた。

寝返りをうつて横を向くと、枕に頬杖を突いてこっちを見るルール・シエルと目が合つた。

いつベッドに入ってきたんだろ ？

わたしが寝たときにはまだ隣の部屋にいたはずだけど。

シバシバする目を「シゴシ擦つて」とやんわりと手を止められた。

「瞳が傷ついたらやつよ」

「んー」

ルール・シエルは掴んだわたしの手を、そのまま自分の口元に運んでちゅつと口付けた。

「へしゃひ

慣れない恥ずかしい行為に奇声を発するわたしに、ルールシェルはくすりと笑ってチラリノートより甘い視線を送ってくる。

「おはよ、神無

指を絡めて優しく握られ、ルールシェルのズベズベの頬に宛てがわれた。

「お、はよ。起きたの？」

「1時間前くらいだね

「起」してくれればよかつたのに」

「可愛い顔して眠ってる神無を見ていたかったんだ。それによまだ朝早いし

「えー 見られてるの恥ずかしいよ？」

むくつと起き上がるわたしに合わせて身体を起こしたルールシェルは、空いてる方の手で顔にかかる髪を搔き上げた。

どうにも色っぽい仕草だ。

「ルルって13歳なんだよね？」

「うん。どうして？」

「 なんでもない」

13歳の男の子は「こんなに色っぽい仕草をするものなのだろうか? ぼやけた頭でそんなことを考えてると、わたしの手を離したルールシェルの手が「」うちに伸びてきた。

「 一?」

「 はだけてるよ」

ルールシェルの視線を辿つて自分の格好を見る。

「 つか

今まで着ていたパジャマは長ズボンタイプだったから、ネグリジエなんて着慣れない。

1番上に付いてるリボンは解けてるし、小さな可憐うらしいボタンは見事に全部外れてる。

膝下まであった裾も捲れ上がってからうじて臀部を隠してるので、

非常に見苦しい。

前が開いてたとしてもわたしのささやかな胸では谷間なんてできないし、隠すほどでもないかと思つたけど、目の前にいるのは一応男の子だから慌ててボタンを留めた。

器用にもルールシェルはリボンを直してくれている。

「『』『』めん」

「いいよ。でも神無は無防備過ぎていけないね ほら」

「わっ！？」

わたしあぐいっと肩を押されてベッドに倒れ込んだ。

質の良いスプリングはわたしの体重を受け止めて軋まない。

「ルル ？」

わたしの顔の横に手を置いて上から見下すルールシェルは苦笑いを浮かべた。

「隙だらけで心配だよ。僕のこと信頼してくれてるのかもしれないけど ね」

ルールシェルしか視界に入らない状況にドキドキするものの、この距離に多少慣れてきたものだ。

「心配つて なにに？」

わたしは彼が何に対して心配しているのか純粋にわからない。

めぐれた裾を片手で直しながら問うと、ルールシェルは呆れたようなため息をつく。

「神無。もしここにいるのが僕じゃなくて他の男だったら 襲われるかもしないんだよ？」

「へ？ 襲われる？？ ふ、あははは？」

何を心配してゐるのかと思えば、わたしには無縁な話だつた。思わず笑つてしまつたわたしをじつと見るルールシエルは眉を寄せている。

「ないない！ だつてこんな色氣の、い、の字もないわたしを襲う人なんていないでしょ？？」

ね？と同意を求めるように首を傾げて見せるとルールシエルは紫色の瞳を細めてわたしを見据え、胸の上にそつと手を置いた。

「うえつ？！」

服の上からやわやわと撫でられヒクッと身体が震えた。

も、もしかしてあまりにも小さすぎて そこに胸があるつて気がつかれてない？！

だとしたら悲しそう

「あ、あの ルル？」

「なに？」

「えつと そこは」

「セヒつて？」

ルールシェルはしゃべりながらゆづくりと手を動かしている。

手の平を使って円を描くように撫でられて、わたしはだんだんと変な気分になってきた。

身体の芯がぼうっと熱くなるような、不思議な感覚。

「ルルつセヒ、一応わたしの つあ？！」

服越しに胸の先を刺激されてビクンと身体が揺れた。

自分でも反応しちゃう意味がわからなくて焦る。

「ルル！そこ小さこけど一応胸なんだよ ！？」

「知ってるよ？柔らかいよね」

「はあ？！」

清々しく言い返してくるルールシェルに対して、カーッと顔に血液が集まつた。

「ちよつ、知つててやつてるの？！」

「やめてよ、セクハラーーー！ルルのへーんーたーーーー！」

足をバタバタさせて暴れるわたしを笑うルールシェルの笑い声はク

スクスと実に楽しそう。

熱れたリングの様に真っ赤になつてゐるだらうわたしとは対称に、ルールシェルは至つて冷静だ。

なんかすゞく悔しい！

「ほら、僕にだつて簡単に襲われてゐる。もつと本氣で抵抗しないと逃れられないよ？」

「や、本氣でつて、そんなことしたらルルが怪我、するかもしないしつ」

「こんなときに僕の心配？ 余裕だね」

ルールシェルは口角を少しだけ引き上げるよつた不適な笑みを浮かべた。

やばい、やばいっ！

この表情をしたルールシェルは危険だ、と数日間で学んだんだ！

「だ、だつてや、わたし童顔だし幼児体型だし？全つつ然色っぽくないからつーき、キス、以上にはなにもされないだらうなつて」

ルールシェルは、わたわたと慌てるわたしを見下ろして満面の笑みを浮かべた。

「それでもないよ？無垢な神無は心も身体もすゞく魅力的だから。

余計、自分勝手に汚したくなる」

「よ、汚？、あーちゅつとー。」

ルールシェルは、シユルと血ら結わいたリボンを解いた。

首元に顔を埋めたルールシェルは、わたしが制止する前にちゅくつと音を立てて吸い付く。

「いたつー！」

「悪い虫避けくらいにはなるかな？」

「むむむ虫よけ？？」

ルールシェルは顔を上げて、ペロシヒピンク色の舌で血身の膚を舐めた。

「わ、ひ、卑猥つ」

思わず正直な感想を述べると、ルールシェルはクスリと笑った。

「色々と教えてあげたいけど、もう、来た、みたいだしました今度にするよ」

「？？」

「ン「ン「ン！」と鋭いノックがされたかと思つと、ルールシェルが返事をする前によく通る声が室内に響いた。

「失礼いたしますわー朝ですのよつ起きてくださいましー。」

「？」

首だけ捻つてそっちは向いたわたしは、口をあんぐり開けて魅入つてしまつた。

声の主は入口近くで仁王立ちして、こっちを見つめている。

ズンズンズンとベッドまで近づいてきた、ルールシエルと瓜二つの容姿をもつ美女は。

きゅっと括れた腰に手を当てて、こっちを睨んでる。

「じょ 女王 女王様 ？」

自分の状況をすっかり忘れるほど、彼女の存在は強い。

ボソッと咳くと、華美やかなオーラを放つ美女はきょとんと大きな瞳を丸くした。

カールした睫毛を瞬かせてわたしを見つめる。

これでもかと巻かれた金髪は、ルールシエルのと同じく柔らかそうで、ふつくらした唇はグロスがのつてぷるぷるしている。

ミルクの様に白い肌は頬だけ桃色に色づいていて、曇りのない空色の瞳はガラスでできてるみたい。

シックな服装なのにオーラがすごい。

「ふつ。 あられもない格好で何を言つかと思えば」

上から目線な言い方だけど、わたしを見下ろすその目に負の感情は感じられなかつた。

「ちょっと? いつまで幼気な少女を押さえ付けてるつもりでして? ！貴方が少女趣味でも一向に構いませんが、男女の嗜みは日が沈んでからにしてくださいる? 」

美女の尖つた視線は、今までわたしをいじめていたルールシェルに移り、辛辣な言葉を投げた。

いや、嘗みとか、そんなんじゃないんだけど

「昼夜問わず発情してるのは4つ足で歩く動物と同じですわよ？ああ、発情周期があるだけ動物の方がましかしらね」

すごい美人だけきつついなーと人事の様に聞いていたわたしは、無意識に服を直しながら2人を観察してみた。

「こんなにそつくりってことは姉弟？」

姉弟揃つてこれほど美形つてことは、両親もきっと喜ぶことだよね。

顔が良くてスタイルも良いなんて 不公平すぎる。

「言葉に気をつけたほうが良い。自分の立場を理解してゐるならね」

事も無げな態度をとるルールシエルに対して、こめかみをヒクつか

せた女王様は、シンと顎を上げてアヘビッドを整え始めた。

わたしあどりしたら良いんだろ

「惑うわたしを差し置いて、ルールシェルは乱れたバスローブをさつと整えベッドを降りた。

ルールシェルは起き上がりつゝどうかと考えあぐねてるわたしの頭をひと撫でして言つた。

「神無、そこに居るのが昨日話した侍女だよ。僕の身内だから、遠慮無く好きに使つと良い」

「え？ あ、はい？ やつぱり身内なんだ。すげく美人さんだもんね」

「うん。 じゃあ神無をよろしく。今日は戻らないから」
言いながら、バスルームへと消えるルールシェルの後ろ姿を睨んでいた美女は、はあーっと大きく息を吐いてベッドの角に腰掛けた。美女の揺れる髪から香る、甘い香にスンスンと鼻をならすと、ふと笑われてしまった。

田元が和らぐとそのままでのトゲトゲしが嘘みたいだ。

ベッドの上で両足を投げ出して座るわたしとは違つて、スカートから伸びる脚を揃えて浅く腰掛ける様子は、育ちの良さを表してゐるようだつた。

「『めんなさいね、第一印象最悪でしたわよね？ あたくし、兄様

の前だとどうしても。言い訳みたいんですけど、見苦しいところをお見せしたこと、申し訳ないと思つてますのよ？」

ただの女王様キャラかと思つたら、シンデレ美女だった！！

唇を尖らせて上目使いで見てくる美女に、キュンと心を奪われた瞬間。

こんなギャップに男は落ちるんだろうな

1人納得していると、ふと会話を思い返して違和感を覚えた。

ん？

さつき、「兄様」って聞こえた？

またかね。

「よしひ と」

白いエプロンを後ろ手に縛り、準備万端だ。

黒いシックな膝上丈のワンピースに、フリル付きエプロン。

ワンピースと同じく黒い靴下とローファーに似た少しヒールのある靴。

髪は邪魔にならないよう、高いところで一つに結わいた。

侍女の制服に着替えたわたしは、ルールシエルが用意してくれた等身大の鏡の前に立っている。

「あらあ。あたくしより良く似合つてゐんじゃなくて？」

隣に並んだ美女とわたし、同じ服を身につけた2人が鏡に映つた。

「マロンさんは髪結わかないの？」

今日もぱつぱつと巻かれた金髪を自然に垂らしている美女 マロンさんは、ふふんと鼻で笑つた。

口元に手をそえて上品に笑う仕草が似合わないのは、昨日1日一緒に行動してよくわかつた事実。

腰に手を当てて「おーほつほつまつ」なんて高らかに笑う姿のまつ

がしつくつくる感じ。

外見と中身は違うものだ。

「よくひつよ。あたくしは王城の下 ハホン、侍女ではないもの」

今絶対、下女とか下婢とかそんな単語言いかけたな。

「貴女のお世話係を任せられただけですからね。それにしても楽な仕事ですわねえ」

髪をくるくる指に巻き付けながらしゃべる姿は、あつちの世界の女子高生を思い出させる。

「食事の配膳以外の身の回りの手伝い、といつことでしたけど 貴女全部自分でこなすもの。あたくしなにもすることありませんわあ

」

そう言ってわたしが使わせてもらつてる大きなベッドに腰掛けたマロンちゃんは、現在18歳でわたしより3つ上のお姉さんだ。

飾り気のない侍女服よりも、美しい装飾が施されたドレスの方が相応しい様に思える彼女だ。

そんな彼女がわたしの侍女的な仕事を引き受けてくれるらしい。

昨日は城の中を案内してもらひつだけで1日が終わってしまった。

行つてはいけない階。

行つても良いけど行かないほうが良い階。

行つてはいけないけど、行つても差し障りのない階。

説明されてもいちいち覚えられなかつたけど

そんなこんなで忙しかつたから、マロンさん本人についてはあまり
聞けてない。

わかつたことは、マロンさんの年齢と2歳の息子さんがいること、
ルールシエルの身内であるということだけ。

出産経験があるとは思えないほど見事なスタイルを持つ、道を歩いて
れば老若男女問わず振り返つてしまつような絶世の美女、マロン
さん。

ルールシエルをそのまま女人にしたみたい。

そんなマロンさんを、わたしみたいな小娘の世話係にするなんて
ルールシエルは何を考へてるんだろ？

とは言いつつも、身近にこつちのことについて教えてくれるような
人がいてくれるのは、すぐ助かる。

マロンさんは、ちょっと言葉遣いはキツかつたりするけど悪い人じ
やない。

今日は気分転換も兼ねて、外の庭に連れ出してくれるようだ。

城内をうろついてても不審に思われない侍女服を、マロンさんで

用意してもらつたのだ。

ルールシェルが調達してくれた服は、どれも品の良い物ばかりで袖を通すのが躊躇われる。

汚しあやつたらどうしよう、とか。

それに侍女服がなかなか自分に似合つてゐる様に思えた。

むしろいつもほつが良いくかもしない。

他人に世話をされるような高貴な生活なんて合はないんだと自覚した。

いつも部屋を掃除してくれたり、食事を運んでくれる年配の侍女さんに代わって、ルールシェルの世話をさせてもらひつかな なんて考へてる。

なにもしないで生活するのは申し訳ない。

用意された朝食を食べ終え仕度が整つたころ、調度よくルールシェルが帰つてきた。

長いローブを羽織つたルールシェルは、心なしか顔色が冴えない。

緊急の用事が出来たと言つて出て行つたから、昨日の朝からずっと仕事してたのかもしれない。

「ルルおはよつ。あ、お帰り?」

鏡の前に立つわたしの傍まで無言で歩み寄ってきたルールシェルは、そのまま寄り掛かる様にして身体を預けてきた。

「わっと ルル、大丈夫？」

ちよつとだけよろけたけど、そんなに体重をかけてるわけじゃなかつたから受け止められた。

髪を上げたせいでさらけ出された首筋に、ぴたりと触れるルールシエルの肌が冷たい。

いつもと違う甘い香がふわりと鼻をくすぐった。

「ねえ、」

「うん？」

「なんでこんな格好してるので。僕があげた服は？」

「あ、」

疲れたせいか、ルールシェルの声は掠れている。

耳元で話されると、息がかかつてしゃばゆい。

気づいたことだけど、わたしは多分首とか耳が弱いんだと思つ。

マロンさんが、ベッドからわたし達をじーっと見ているのがわかつて、なんかもう色々と氣まずくなつてきた。

「さよ、今日はね、マロンさん以外の案内を頼んだの。動きやすいよつ」 いつの服を用意してもらつたんだよつ

「ふーん」

我ながらそれらしい言い訳が出来たと思つたけど、ルールシエルからは不機嫌そうな返事が返つてくる。

吐息がくすぐつたくて、プルプル震えそうになるのを我慢するので必死だ。

「ね、休んだら? ルル徹夜してたんでしょ?」

視界に入る編糸の様に細い金髪をそつと撫でれば、ルールシエルはそれを避けるようにわたしから離れた。

「昨日 汚れたから汚いよ

「やう? そんなことないよ。いつも通りサラサラじゃない?」

無造作に束ねられていても、質を失わない髪は相変わらず綺麗なのに

「あら兄様、自覚なさつてゐなうわつたと洗い流してきたりいかがですか? 香が残つてましてよ」

無言だつたマロンさんはルールシエルを見ずに突然そんなことを言った。

「ひりつとマロンさんを見やると、ニヤリと意地悪そうな笑みを浮か

べている。

「？？」

ルールシェルは、ハテナマークを頭上に浮かべるわたしの前で、罰が悪いような表情をした。

くるりと踵を返し、ささつとバスルームへと向かつてしまつて声をかけるタイミングを無くしたわたしは、ん？と一人首を傾げるのだった。

10—居場所（2）（後書き）

読みでください あらがといひにれこますーー！

11 居場所（3）

「 いじりですわよつ。早くいらして！」

「 ちよつと待つてつてばー。 いじはー？」

ひたすら長い廊下と大量の階段を越えたマロンさんとわたしは、重々しい扉の前にたどり着いた。

木製なのか金属製なのか、何でできてるか判断しかねる、細やかな彫刻で飾られたその扉。

「 いじから外に出られるの？」

「 そうですね。 ここはある程度地位の高い人間でなければ、開くことを許されない扉ですの」

「 へえー そうなんだ」

「 ええ。 ちよつとそこの貴方、 ここを開けていただけないかしら？」

マロンさんが扉番らしき男の人に言つと、彼女の顔をまじまじと見たその人は、こつちがうろたえるほどの慌てぶりで開閉の準備に取り掛かった。

ルールシェルがあの若さで団長を務めてると言つてたから、もしかしたらマロンさんもすぐ地位の高い人なのかもしれない。

「正面から見る庭が一番綺麗なのよ！煩わしい人間関係の渦巻く腐つたような城の中で、唯一安らげる素敵な場所ですよ」

「ちょっと腐つたようなって」

周りには兵士の様な方々がいるのに、気にするそぶりも見せずズバズバ言つてのけるマロンさん。

「あの マロンさん？」

「あひ、なにかしら？」

「つかぬ事を聞くけど マロンさんって、もしかして本当に女王様だつたりする？」

「女王様？くすつ まさか」

そつと笑つた表情や言動がルールシエルにそっくりだ。

やつぱり血の繋がつた姉弟なんだ ちょっと羨ましいかも。

「女王ではないですわ。近いと言えば近いですけど。開きましたわ。行きましょ？貴方達、『」貴方様でしたわね」

「まつ…こつていらっしゃいます…」

マロンさんの後に続いて扉をくぐると、兵士の方々はわたしにまで深々と頭を下げて下をつた。

「あ、ありがとうございます」

「

「せつ・じつそ足元にお氣をつけて!」

体育会系のようなハキハキとした言葉遣いで送り出されたわたしは、田の前に広がる景色に息を呑んだ。

「へ、わあ ー。」

色とりどりの花々が咲き誇る広々とした庭 と並つより庭園と呼ぶべきところに魅せられ、感嘆のため息が零れる。

一步外に足を踏み出した瞬間、鼻をくすぐるような甘い香がわたしを包んだ。

マロンさんから香の甘い匂いとはまた違う、身体に染み渡るようなホツとする香だ。

久々に聞こえてきた植物達の声が、やけに大きく感じて耳鳴りがする。

声が大きすぎで、言葉としては認識できないけど、なんだかみんな浮き浮きとしてるような気がする。

庭園の中央にある噴水から溢れる水は、しぶきが上がって太陽の光をキラキラと反射していた。

少し距離があるのでここからでも輝いて見える。

城の周辺に森があるからか、小鳥が遊びに来てるみたいだ。

轟りが聞こえてきた。

ここ数日、外つていう外に出てなかつたからかわからないけど、流れる風の音や、草花の色彩が一層鮮やかに感じる気がした。

感動に立ちすくむわたしを待つてくれてるマロンさんは、すくく穏やかな表情をしている。

この美しい庭園に癒されるのかもしれない。

マロンさんのところまで走つていいくと、心なしか身体がふわふわと浮かぶような感覚がした。

足が軽い。

「マロンさんところまで走つていい、こんなに綺麗な庭園があるなんて……」

わあわあ騒ぐわたし、マロンさんは優しげな笑みを浮かべている。

「これだけ喜んでいただけり、あたくしてしても嬉しいですわ。

噴水まで歩きませんことっ！」

「行くつー！」

走り出したい衝動を抑え、ゆつたりとしたマロンさんの歩調に合わせて歩を進めた。

石で出来た細い道を通りて噴水までたどり着くと、そこは水浴びを楽しむ色とりどりの小鳥達がいた。

わたしも一緒になつて遊びたいくらい。

「すゞーーい！ 真っ青な鳥がいるつ！」

「宝石の様ですわね。シトをこぢらに」

少しここで休みましょう。カンナ、バスケット

マロンさんはわたしが持つてたバスケットから、ハンカチを2枚取り出し噴水の縁に敷いた。

大きい噴水は縁も幅があつて、深く腰掛けても水しぶきがかかる心配はないみたい。

「わ、お座りになつて」

「ありがとう……本当に綺麗なとこ。こんなところ初めて来たよ」

「ええ、この庭は腕の良い庭師を雇つて管理させてますからね。一切魔法は使ってませんのよ？」

「へえ。噴水の水も澄んでるね！」

噴水を覗き込むと、ゆらゆらと揺れる水面がわたしの顔を映す。

水浴びをしていた青い鳥が一羽、わたしの肩に留まってきた。

—あら、ずいぶん人慣れした鳥ですこと

「だね、人を怖がらない」

『見ない顔だー。お姉さん姫様のお友達?』

「わっ?ー」

肩に留まつた青い鳥は、クリクリの黒目をわたしに向けて話かけてきた。

『むこうの世界じゃ一方的に声が聞こえるへうこだつたのこー!』

「ー、こんなひま、はじめまして? あの、姫様ってマロンかさんのこと?』

『わうだよー驚きつー! お姉さん僕の声聞こえるんだねー!』

試してみると、小鳥は嬉しそうに羽をパタパタさせている。

会話が成り立つてゐー!

「うん!わたしの名前は神無。あなたは?』

『僕?名前なんてな』

「 カンナ?』

訝しげな表情をしてわたしを見るマロンがふと気がつき、慌てて口を噤んだ。

小鳥の声が聞こえないマロンにとってみたら、わたしは独り言をしゃべつてゐる変人にしか映らないだらうか。ひ

やつてしまつた

「えつとあの」

「動物や植物の声を聞くことができるつて話は、ビデオから本当みたいですね」

良い言い訳を考えようとしたところ、予想外のコメントがなされ、わたしは「へ?」と間抜けな声を発してしまった。

「聞いてますわ。安心して? 独り言しゃべってる変人なんて思つたりしませんわ」

「あ うん、ありがとうございます。」

『ねえねえ! なんでお姉さんは僕と話できるんだろ? ねつ

どつやらルールシェルから聞いたみたいだ。

とりあえず変人扱いされて、避けられる恐れはないみたいだからよかつた。

ほつと胸を撫で下ろす。

知らない間に、関わりを持った人から拒絶されることを、恐れていったみたい。

「良いですわねえ。あたくし動物なんて苦手ですわ。なにを考えてるかわからないもの」

『カンナ、姫様はこんなこと語つてゐるけど、毎朝僕らにパンをわけてくれてるんだよ?』

素直じやない彼女が可愛らしくて、思わず小さく笑つてしまつた。

「わうなんだ。マロンさんも動物好きなんだね」

「だから、苦手ですつてば。その鳥が何か言つてますの?」

む、と形の良い眉を寄せついたマロンさんは、思い出したかのように手をパチパチと瞬かせる。

「わうですわ! 全く人の手が入つていない花畠もありましてよ?」

「本當? 行きたい」

「あちらの方が野性の動物も多くいるでしょ? から。でも今田は無理ですわね。田を改めて、兄様に連れていってもらひと感じですわ」

「うそつー。あ、そういえば」

すっかり忘れてた。

とまつよつたとしてた事を思ひ出しちまつた。

なんだか、それは早めに解決しないといけない事柄のよつて感じられるけど。

口陰を作るよう立っている背の高い木の下には、2人掛けのベンチが置かれている。

あそこに座つたら心地良さそうだな、なんて現実逃避的に逃げ回る思考を無理矢理呼び戻した。

ふわふわつきつき氣分が急降下するのにがっかりしつつ、腹を括つて直球に尋ねてみる。

「ねえマロンさん、なんでルルのこと“兄様”って呼ぶの？ルルはマロンさんより年下なのに。マロンさんがお姉さんでしょ？」

「 はい？」

マロンさんは怪訝そうな顔をして小首を傾げた。

それからなんとも言えない微妙な表情を作つて、シャープな顎に指を当てる。

「まあかとは思うけれど 聞いてないのかしら？ ビツしましょ、あたくしから話して良いのかしら。うーん ビツしましょ、う

だんだんと深刻な面持ちになつてこくマロンさん。

一人でぶつぶつ呟いてるマロンさんを見て、やつぱり聞くべきじゃなかつたかな、と思つた矢先、それは爆弾のように投下された。

一瞬耳を疑つたけど、草花の囁きや風の音に負けない、澄んだ声を聞き違えるはずもなく。

「 あの方、今年で 21 になりましたわ。身体は“ 13 歳の頃まで ”
若返つてしまつたけれど 」

12 居場所（4）

『呪いです。闇あんの魔女から受けた呪詛。兄様は17の時に“肉体の成長”を奪われたのですわ』

マロンさんが目を伏せると長い睫毛が影を作る。

『以来、徐々に退化つまり若返ってしまいます。意識や魔力は変わらないのに、いえ、年相応に成長してますのに、身体だけ幼くなつていいくようで、魔力のコントロールが難しくなつてゐみたいですね』

この世界では、魔女とか、呪いなんものが普通にあるんだ。

なんでも、ルルが？

『それは本人の口から聞いてください。兄様が呪いをかけられてから4年が経ちましたわ。今は13歳の頃の姿をします。あと13年間呪いが解かれなければ、赤子に戻り最終的には』

なにそれ。

最終的にはなに？

マロンさんの悲愴な面持ちは、言葉の続きを無言で訴えてきた。

『今年いっぱい特例で『えられた数々の権利が剥奪されてしまつのですわ。12歳まで戻つてしまつたら、ここでは子供として認識されますから』

権利剥奪？

今の地位ではいられなくなるって意味だよね？

その、呪い を解く方法はないの？

『呪いを解く方法？ありましてよ。呪いをかける方法があるならば、解く方法だつてきつと』

“きつと”てことは 今はないんだ。

『魔女の力は特殊なのですわ。だから同じ魔女にしかその力を相殺できないのよ。しかも対極の、光 こう の魔女の力が必要なの』

『

じゃあその光の魔女を探して来れば良い話じゃない？

『そう簡単にいかなものですね。光の魔女は争いを好まないから、陰謀渦巻く場所には現れませんの。探そうとしても姿を眩ませます』

じゃあどうやって光の魔女を見つけたら良いの？

『そう、そこで兄様は、まだこちらの人間が入り込んでいない異世界まで、光の魔女の“質”を持った人を探しに行つたのですわ。そこでようやく見つかった 貴女です』

え？

見つかった？

わたししが??

『 つて聞いてませんの?ええ? ! 知りないですつて? 契約? あまあ必要ですわね、上層部の魔導師ならば』

わたし、何もできないよ ?

わたし、ただの人間、だよ?

『 今は未だ、ね。 そう 聞いてなかつたのね 貴女の力が兄様の運命を握つていると 。だから、』

「 、 な。 神無? 」

「 えつ? あ、 ああ、 なにつ? 」

怪訝な表情をした眉目麗しいルール・シエルがわたしを見つめている。

いけない、 ボーッとしてた。

マロンさんから重大事項を聞いたあの日から、 3日経つて今にいたる。

事は深刻で、 どう触れて良いのかわからない。

にわかには信じられないけど、 ルール・シエルの大人びた雰囲気や仕草をよくよく観察してみると、 頷ける。

どう見ても1~3才の少年には思えなかつたから。

羽織つてた上着を脱いで、シャツのボタンを外すとか、グラスを持つ手つきとか。

それはそれは大人っぽかつたから。

心は成長するのに、身体だけ幼くなつてくつてどんな感覺なんだ
るづ。

できてたことが、できなくなつてく感覺 かな?

まったく、呪いつてなんなの?

魔女つてなに。

何日かぶりに2人で朝食を摑つてゐる最中に、そんなことで頭がいっ
ぱいになつてしまつ。

このところ朝からずつとマロンさんと一緒にいてくれたから、ルー
ルシェルのことだけを考えなくて済んでたけど。

こうして2人きりになつてしまつと困つたことに、必然的に意識は
彼に向かつてしまつんだ。

「『じめん、なんかぼーっとしちやつてた

強張つた表情を見せないようと思つて笑つてみたけど、彼はわた
しのやさいな変化を見逃してくれない。

「何かあつた？考え込んでるみたいだけ。ほひ、」

すっと視線を下げた先には、一口大にちぎったパンが山になつているお皿があつた。

口に運ぶのを忘れてひたすら手だけを動かしていたようだ。

「あ」

「僕になにか隠してる？前はもつと色々話してくれてたのに」

眉毛を下げる寂しそうな表情をされると、思わずサラサラふわふわの髪を撫でてあげたくなる。

けど相手は自分より年上の、成人男性だと言つことを忘れてはいけない。

この美少年の実年齢は21才なのだ。

なでなでするなんて論外だろ

それには、以前いろんな話をしたのは、貴方を人だと思ってなかつたからなんですよ

「もしかして、侍女に何か吹き込まれた？」

一瞬ギクッとしたけど、努めて表情にださないよう平穏を保つたわたしは、首を横に振つてごまかした。

「ううん、なにも？ たださ。今みたいになにもしないで衣食住世話してもらつてるので、申し訳なくて」

嘘は言つてない。

住む所、食べる物に困らなくて済むのはとても助かるけど、1年間こちりで暮らしていくなら仕事を見つけないと。

そもそも、わたしが連れてこられた理由を明確にして、やるべやいとをやらないでほいけないはずだ。

「わたしにできる事、ないかなって思つてて」「

どうすればルールシールの役に立つのだらうか?

秘密を知つてしまつた以上、のんきに生活していく良ことは思えない。

一刻も早く、魔力を身につけなくてはいけないはず。

でも自分が魔法を使えるようになるなんて、想像つかない。

複雑な心境だ。

ルールシールのためになにかが出来ないなら、わたしがこちりに居たてらいい。

もんもんと考へはじめる朝から気持ちが沈んでしまう。

第一、彼自身がわたしに本来の目的を言つてくれないんだもん、どうしたら良いかさっぱりわからなー。

「神無は僕の傍に居てくれれば、それで良いんだよ。契約もさせてもらつたし、今すぐに何かする必要はないから」

「や、でも」

早く呪い、を解かなくちゃいけないんじやないの？

とはさすがに聞けず、黙り込むわたしにルールシェルは温かい視線を向ける。

「君はまだ自分の内に秘めてる魔力を自覚してないみたいだけど、こちらの空気に当たつていれば自然と身についてくるから大丈夫。心配しないで、今は体調を崩さないようにして、こちらの世界に早く慣れてほしいんだ」

「うーん。、」

ルールシェルはわたしを無理矢理連れてくる程焦つてて、早く呪いを解きたいはずだろうに どうして話してくれないんだろう。

山になつたパンを口に放り込みながら頭を悩ませる。

「ねえそういうえば、侍女の仕事をしたいって言つてたみたいだけど？」

ルールシェルは食べ終えた食器を片付けに、絶妙なタイミングで入室してきた侍女のセリーナさんをちらりと見やつた。

「そんなことする必要はないけど、どうしても仕事をしたいというなら、僕の手伝いをしてもらつて良いかな？」

「ルルの手伝って、是非ぜひ一回もおこなうでもあるよ」

「ふふ、神無は眞面目だね。やつこつといふも含めて、かうく好きだよ」

ルールシエルは口角を少しだけ上げて笑みを作る。

テーブルの上に置かれたわたしの手に、やつと血ぬの手を重ねると円を描くように撫でてきた。

「なんでもする、なんて言われちやうと無理なこともお願いしたくなんな いこの?」

艶っぽい笑みを浮かべてそんな台詞を囁かれたが、意味はわからな
くてもドキドキしちゃう。

なんなんだ、ルールシエルといふ男は。

普通の女のなら色々勘違こじて、口ロシとオナフをちて違こない。

罪作りなやつめ。

赤くなつただらつ顔を背け、やつそく仕事内容について尋ねてみることにした。

「で、何をしたら良こ? わたしにもちゃんとできるかな? 今日から始める。まだ城の構造とか把握できていないんだけど」

「あははっ、そんなんに焦らなくて良こよ。最初は簡単なお使いから

頼もうかな

なんだかルールシェルの優しさが伝わってくる。

慣れないこちらの生活に少しでも馴染めるように、少しでもストレスを感じないよう、「わたしに気を使ってくれている。

でもそれじゃ駄目な気がしてならない。

元の世界に居た時は、何の目的もなくただただ毎日を過ぐしていくよかつた。

それが幸せだと思ってたし。

愛してくれる人の傍で笑つてられる毎日が。

でもここではわたしにしかできないこと、を見つけてみたい気持ちもあるのかもしれない。

ルールシェルもマロンさんも、親切にしてくれるから甘えてしまってたけど、そもそもここにわたしの居場所はなかつたはずだから。

自分の力で自分の居場所を作らなくちゃいけないんだ。

今までみたいに「えられるモノをただ受け入れるんじゃなくて。

「明日から仕事頼もうかな?僕の部下を紹介するね

目を細めて微笑むルールシェルが遠く感じる。

そっか、わたしは焦つてるんだ

今この世界に、わたしの居場所は

ない。

そつまづいてしまったから。

12 居場所（4）（後書き）

あけましておめでとひいられこます m (—) m
だいぶ遅くなつてしまつました。。。またゆつくりペースで頑張り
たいと思います！

13—新たな一面（1）

「ほひ、おぬしが主の。ずいぶんと可愛らしきの。主は女の趣味が変わったようだな。どれ、じつを向いてみよ

「は、はあ」

わたしの顎をがつちりと掴み、右に左に向きを変えてじにつと見つめてくる、やけに古めかしい言葉を使う少年。

彼もルールシエルの部下らしい。

ルールシエルが直接指示をする部下は3人いて、1人は変人で変態のダネルさん。

あとの2人が、今わたしを品定めするよじロジロ見ていくシャスさんと、感情の籠つてないビー玉のような瞳でこちらを観察しているシャンさんらしい。

2人はそつくりで案の定双子だと言う。

背丈も容姿もそつくり。

中性的な顔立ちをしているせいで、性別すら区別がつかない。

シャスさんは男でシャンさんは女だそうだけど。

なぜこの2人と一緒に居るかと言つと わたしが仕事をしたいと言つ出したからだ。

1人で仕事をするにはまだ難しそうだから、2人のどちらかと一緒にやられてもいいことになつたのだ。

にしても、厄介な呪いを受けてるルールシェルを団長に、その部下達も一癖も二癖もありそうだ。

「ちょっとあの、近いんですけど」

わたしよつちよつと高い位置から見下ろすシャスさんの顔が、異様に近いのは気のせいではないはず。

背を反らして距離を取つと試みたわたしに、シャスさんは大袈裟に反応した。

「おお、すまん。いや、やうな匂いがするもんだからな、ついつい」

己の唇をペロリと真つ赤な舌で舐めるシャスさんに、ゾッと鳥羽がたつ。

薄く開いた唇の隙間から覗く鋭い犬歯は、人のものではないようにも見えた。

言い表せない恐怖のような感覚がわたしを襲つた。

「、まあつてわたし食べ物じゃないです」

「良い香りがするんじゃ。汚れのない純潔の香り。おぬし生娘じゃ

る」

「匂いでわかるんですか？…」

セクハラもここといだー

羞恥で熱くなつた頬をそのままに、非難するような口調で言つて、シャスさんは口角を吊り上げてくくつと笑つた。

本当の意味で食われそう。

危ない光を瞳に宿したシャスさんが、わたしの頸を掴んでた手を下方に滑らせ頸動脈に指先を当てる。

身の危険をひしめく感じ。

カチンコチンに固まつたわたしを見下ろす双眼は、嬉々として輝いて見えた。

多分氣のせいじゃない。

え、このままだとわたし色々とまことに氣がする。

「うわ、ちょっと待つてください…」

「シャス、それくらいにしておけ。手は出すなと言われたのを忘れたか？」

さつきからだんまりだつたシャンさんの一聲で、シャスさんは心底残念そうにわたしから手を離した。

ホツと緊張が解けジリジリと後ずさるわたしを尻目に、シャスさん

は大きなため息を吐く。

「シャン、お前は相変わらずお堅すぎじゃ。ただの戯れではないか。ちょっとした触れ合いだろう? 新しく仕事を共にする仲間の顔をじっくり見ていただけじゃ」

な?・と同意を求められても頷けるはずがない。

十分に距離を取らうと思つて窓際までさわさと移動した。

わたしを見ていたシャンさんは、ほらみひとびとばかりの顔をシャスさんに向ける。

「完全に警戒されてるわ」

「ふはははっ! 生娘の反応は初々しくて可愛らしさからたまらんな!」

わざわざから生娘生娘連呼して、セクハラもいいところだ!

「あのー、生娘とか言わないでください、セクハラですかよーーー!」

「「セクハラ?」」

見事なハモりを披露されて少し引く。

「セクハラって言つのは、職場とかで男性から女性に対して行われる性的、差別的な言動のことです! 反対の場合もあるけどー!」

「せー、なるほどな」

わたしの説明に納得したように頷く2人を視界にいれたままため息が出た。

強気で言い返したけど気分はだだ下がり。

「この2人とうまくやつてけるのかな ？」

シャンさんはともかく、シャスさんは本気で危険な気がしてならない。

「まあまあ、そう固くならんで。ワシらは主の信用を得て今ここにおる。安心するが良いぞ」

胸を張つて言い切るシャスさんは、さつき散々ルールシエルにわたしに手を出すなよと念を押されていたような

大丈夫かなあ

「さて、そろそろ仕事に取り掛かねつ。今日はワシと共に行動してもらひうござ」

わたしの不安を意に介する様子もなく、ズンズンと近づいてきたシャスさんに手首を掴まれた。

あげそなになつた悲鳴を飲み込み、自由な方の手を咄嗟に伸ばしてシャンさんの手を掴む。

「おへ、何をしておる」

「い、いや」

「」

「おい、何故シャンを掴む。離さぬか」

「あの、ですね」

「」

「おい、」

「えつとー」

「」

3人横一列に並んだ状態でわたし達はフリーーズする。

沈黙の空気が流れて、シャスさんは眉をひそめてわたしを見る。

シャンさんはあからさまに迷惑そうな視線を投げてきた。

わたしがシャンさんの手を離せば良い話なんだけど

この手を離して1日シャスさんと一緒にいるのは、正直怖くて無理だ。

外見が問題なのではなく。

むじりぱりぱりした瞳は可愛らしき。

膝上までの短めのローブを羽織つてゐる身体は、見た目からして華奢だし、とても乱暴するよつには見えないけどなんと云つか、シャスさんは雰囲氣からして野生味があつて、安心感に欠けてゐるんだ。

「えつと、今田はシャンさんの仕事を一緒にさせてもいいたいなつて、思つてて」

「シャンと？ 何故じや」

シャスさんは器用に片方の眉だけを上げてわたしを見た。

まったく、ルールシエルはなんで居てほしいときにはないんだ！

それらしい理由を探して視線を泳がすわたしに、シャンさんは短いため息をついた。

「良いだらう。シャス、今日は私が共に行動する」

相当困つた顔をしていたのか、わたしの顔をチラリと見たシャンさんは、仕方なくとつた風に了解してくれた。

パツとわたしの手首を離したシャスさんは肩をすくめてみせる。

「残念、ワシは怖がられてしまったよつだのう。仕方がない、本田はシャンと共に行け？」

「あ、ありがとうございます」

光を宿していないシャンさんの瞳は作り物のようで、何を考えているのか解らないから気後れするけど 同性だから怖くない 気がする。

「シャンさん、よろしくお願いします」

シャンさんは、手を離してぺこりとお辞儀したわたしに無言で頷いた。

安心からか、自然と顔の筋肉が緩む。

ほつと胸を撫で下ろすわたしの、頭の先から爪先まで視線を這わせたシャスさんは閉じていた口を開いた。

「 それにしても。間近で観ると一層幼いな 着痩せするのか？」

「 はい？」

シャンさんが言わんとしていることが解らず間抜けな返事をしてしまつた。

「そんな幼児体型でびりゅうて主を落とした、と聞きたい

「お、落とした？」

「胸も尻も氣の毒な程に無いように見えるが？」

はあつ！？

氣の毒つて！？

ピシッと笑顔を貼付けたまま固まるわたしを、チラチラ見ながら笑いを堪えてるシャスさんが視界に入った。

「 床が上手いようには見えないが。 いや、無垢な顔して淫乱な性向なのかもしないな」

誰が淫乱だよーー！

「く、ふふつ ー。」

肩を揺らして笑いを噛み殺しているシャスさんを見た後、視線を平行移動させてシャンさんを見た。

シャスさんは玩具を見るような目でわたしを見るし、シャンさんは見下したような視線を送つてくる。

敵意は無いようだけど、どう考えても好意的ではないのが明らかで。

どうやら2人ともわたしを快く思つてないみたい。

確信にも近いものを感じ、深いため息を吐きたい気持ちで潰されそうだ。

この世界でうまくやつていける自信が、まったくなくなつた。

「 もう ありえないわ 」

仕事をもらえた初日から、気分は急降下する一方だ。

13_新たな一面(1)(後書き)

ずいぶん間が空いてしまいました…

14 | 新たな一面（2）（前書き）

アクセス、お気に入り登録ありがとうございます！

14 新たな一面（2）

覆水盆に返らず だつて。

後悔先に立たず、かな？

ちょっと違うかもしないけど、多分そんなんじ。

どうして黙つてシャスさんの方に行かなかつたんだろう。

素直について行けばあんな場面見なくてすんだのに。

自分が予想外に衝撃を受けてるといふことに、笑いすら込み上げてくる。

「 はああ～ 」

いやね、予想してなかつたわけじゃないけど。

あんなに美形なんだから、幼くたつて恋人がいるかもしないってわかつてたよ。

そもそも中身は大人なんだし。

だけど目の前で、なんの前触れもなく、濃厚ラブシーンを見せられたら、誰だつてうろたえるわ！

見られてた本人は気付いてないかもしないけど、こいつとしては気まず過ぎる。

同じ部屋で寝起きするのなんかやだなあ

どんな顔して話せば良いんだろ？。

お馴染みとなつた部屋の前で行つたり来たりウロウロ歩き回つてたわたしは、少し落ち着くために来た廊下を戻りつゝ思つた。

確かにこの階の角の部屋にはピアノが置いてあつた気がする。

そんな上手には弾けないけど、気を紛らわせるには調度良いかもしない。

それは半日前のこと。

結局シャンさんの仕事を手伝うことになつたわたしは、背筋を伸ばして颯爽と歩いていく彼女の後をワタワタと追つていた。

長い廊下を過ぎ、渡り廊下のようないつこを越え、たどり着いたのは資料室。

ルールシェルの研究室にあつた資料を、遙かに超えるほどの書物が鎮座している。じ。

古い本特有のかび臭い臭いはしないけど、ちょっと異質な空間だなつて思つたのが正直な感想。

この資料室に入るのにも回も鍵の掛かつたドアをくぐつたし、中央

にある円柱の棚にびっしりと収納されてる本は、見る度に場所が変わっている。

背表紙がキラキラ光つて綺麗だなって目についた本が、次に見た時にはその場所から消えてたり。

ここにも魔法が使われてるんだろうな。

ずっと上方に天井が見えるから、一応この棚にも終わりがあるようなのでホッとした。

円柱の棚を中心に螺旋階段があつて、どうやら階段を上がり下がりして目当ての資料を探すらしい。

明日は筋肉痛決定だ。

一体何階まであるんだろう

「1、2、3 7、8」

「21階だ」

「に、21-?」

階を数えようとしていたわたしに、シャンさんはボソッと教えてくれた。

その数を聞いて開いた口が塞がらない。

「……でも、目当ての資料を、探すんですよね？」

「そうだ。捜し物は私がする。お前は13階の5番室内に居り」

「は？」

13階まで上れと。

シャンさんは涼しげに顔でそういって、皿皿は軽い足取りで螺旋階段を上り始めた。

本の表紙を細い指でなぞり、ぱりぱりと選んでいく。

わたしがボケーッと眺めている間に、両手にぱいに資料を抱えたシャンさんは、上のスピードを変えないままある階まで上つさつた。

「13階の5番はいじだ。いじで待つ」

上からふつてくるシャンさんの声が室内に響く。

心なしかじだまして聞こえるよつた。

あんなとこまで上るんだ

仕方ない、とため息をついたわたしは、螺旋階段をギッと睨みつけて氣合いを入れた。

順調に上り始めたものの6階くらいで息があがり、棚にもたれ掛かって休んでると。

表情一つ変えないシャンさんが、わたしの目の前を通りて降りて行

つた。

それから何冊か分厚い本を抱えて上っていく。

何往復してるんだろう

汗はかかないにしても、ゼーゼーしてゐわたしと違い、シャンさんは呼吸を乱してゐ様子はない。

絶対体力お化けだ

ふつと息をついた後、わたしはまた重たい脚を持ち上げた。

日々の運動不足さを痛感させられながら、やつといれひとつ1-3階まで上りきることができた。

1つの階に部屋が5つあって、そのうちの一室のドアが少しだけ開いていた。

「 じるが5番 ？」

恐る恐るドアノブに手を添え押してみる。

キイと小さな音を立てて開いたドアの中には、資料が山積みになつたガラスのテーブルとオシャレなソファーがあつた。

全体的に暖色系で統一された、隠れ家のようなその部屋は居心地が良さそうだ。

部屋に足を踏み入れると、フカフカの絨毯が受け止めてくれる。

部屋に1つだけある大きな窓からは太陽の光が控えめに差し込んでいた。

そろそろと窓際まで行って外を眺めてみる。

13階まで上つただけあって それなりに高い。

遠くに建物が密集する場所が見えて、あれらが城下街みたいなものなんだと思った。

それ以外にあるのは、森のみ。

本当に自然が多い場所なんだ

縁に癒されてほっと息を吐き出すと、いつの間にか部屋に居たシャンさんが「コーヒーをのせたトレイを持って近づいてきた。

「あ、ありがとうございます」

無言でカップを差し出した彼女は、自分の分の「コーヒーをテーブルの隅に置くと、部屋の奥へと消えて行った。

あっちには給湯室があるのかもしれない。

しばらく窓辺に身体を寄せて外を眺めてたわたしは、戻ってきたシャンさんに声をかけられてソファーに歩み寄った。

「ソファーに座れ。お前には資料を順番に揃えて整理する仕事をしてもいい」

「はい」

20枚ほどの洋紙が1束になつた資料が手渡された。

これを見本に揃えろといつとか。

テーブルの上には、シャンさんが探してきた分厚い本の山と隣り合させて、A4サイズの洋紙の山がそびえていた。

「 これ、全部？」

「当たり前だ」

あつさり言い返されて気が遠くなつてゐるわたしを差し置いて、着ていたローブを脱いだシャンさんは、シャツの袖をまくり本を手にとつてパラパラと凄い速さで読みはじめた。

その速読にも驚かされたけどそれ以上に、シャンさんの完成されたしなやかなプロポーションに目が釘付けにされた。

本を支える指や手首は、折れるんじゃないかつてへうこひまつそりしているのに。

胸の膨らみは窮屈そうにシャツを押し上げてる。

ぼ、ボタンが弾けそつ

よくよく観てみると、シャツから透けて見える腕はただ細いだけじゃなくて、適度に引き締まつてるようだ。

まるで無駄な贅肉がない身体は、有名な画家が描いた一つの作品の
ようと思える。

おかしい！

そんなに歳は変わらないよつて見えるのに

この発育の差は絶対おかしい！

わたしのなんて一向に成長する気配がないのに！

ずるこつ！

嫉妬混じりにシャンさんの身体をじとーっと眺めていたら、ふいに
その華奢な肩が震えだした。

「くくく。お前は考えてる事がなんでも顔に出るんだな」

「なつー！」

そつと顔を上げると、不自然に口角を上げたシャンさんの顔
があつた。

「——もつー……笑ってるんですか？馬鹿にしてるんですか？…
ちーーー！」

今考えてることがバレたなり参め過ぎる。

こつそ思いつきつ笑つて馬鹿にすれば良じのにーと思つて問つてみ

ると、シャンさんは眉を寄せてそつと自分の頬に触れた。

「　　“笑った”つもりだったが　あまりうまくいかなかつたか　　」

ポツリと呴かれた言葉の意味を考える前に、シャンさんの手が伸びてきて顔面をガシッと捕まれた。

「ふわあ～！？」

「“笑み”を作るのは容易ではないな。　お前を観てると簡単にできやうなのに」

「は、はな　っ」

「顔の形が変わるつ！」

結構な力で捕まれて頬つぺたが痛い。

シャンさんの腕をペシペシと叩いて、離してもらおうともがいた。

「ひやんさん！いたひよ！いたひつ　ー」

本格的な痛みがやつてきたわたしは、うつすら滲んできた涙で潤む視界でシャンさんを睨んだ。

わたしの視線を真正面に受け止めたシャンさんは、パチパチと瞬きを数回すると手の力を少しだけ緩める。

「　　そうか、その表情は良いな。弄びたくなる。　だが“作る”のは難しそうだ」

「は？！意味わからないんですけど」

緩んだ手を押しのけて、痛くなつた頬つぺたをわざつた。

「表情つて感情によつて変わるものだから、“作る”ものじゃない
と思います」

「なら感情が无い者は表情がないといつことか」

「まあ、そういう事になる、かな？」

よくわからない話に進んでいくつる氣がする。

わたしの曖昧な返答に、シャンさんは納得したように頷いた。

「なるほどな。どうで出来ないわけだ。私にはそもそも感情がないから。もつ少し“表情”を作れと主に言われたが、不可能に近いな」

シャンさんは独つて語りだした。

感情が無い人間なんていふのかな？

主つてルールシエルのことだよね。

ルールシエルがシャンさんに表情を作れつて命令したの？

そんなこと無いとは思えないけど。

「シャンさん、表情は無理に作る必要はないんですよ？嬉しかったり乐しかったりしたら笑うし、悲しかったり泣きます。その時々で自然に変化するんですから」

「

」

ね？と伺つようにシャンさんを見れば、理解不能と言いたげな表情をした彼女がわたしを見つめ返した。

「ほら、今『意味不明』って思つてるでしょ？“表情”にでてますよ

小さく笑みをこぼしたわたしが、シャンさんの瞳に映つた。

出合つて初めて、シャンさんのガラスのような瞳に、わたしといつ存在が映つた瞬間だつたと思つ。

(3)に続きます!

15 新たな一面（3）

シャンさんはもしかしたら不器用な人なのかもしれない。

わたしに蔑んだような視線を投げてくるのには、深い理由があるのかも知れないと思った。

弾むような話題が2人にあるわけもなく、お互い自分の作業を無言で進めていた。

本のページをめぐる掠れた音と、トントンと資料を揃える音だけがわたし達を包む。

どれくらい経ったか、『えられたノルマを半分ほど消化した頃、わたしのお腹が盛大に自己主張した。

「ぐうう～」

お腹すいた

あれからぐらぐらの時間、じつやつて作業を続けてたんだりつ。

シャンさんは資料に目を通しては、スラスラと洋紙に何かを書き留めていく、という動作を淀みなく繰り返している。

「休憩にするか」

わたしのお腹の悲鳴を聞いたシャンさんは、手を止めてフツと肩の力を抜いた。

「だいぶ進んだな」

「はい」

シャスさんはわたしがまとめた資料をざつと確認し、冷たくなったコーヒーを飲み干した。

「あの、お皿せびいで？」

気になることを尋ねてみると、シャンさんは少し考え入るようなそぶりを見せた後、無言で給湯室に消えていった。

あれ、行つちやつた？

びついたものかと、足をぱらぱらとせんべつ待つていると、数分も経たなこつちにお皿を左手に持つたシャンさんが戻ってきた。

「食べろ。面食だ」

コトコと皿の前に出されたお皿には、一口大のサンドウイッチが綺麗に並べられてくる。

「美味しそうっつーーーただきますーーー」

お腹が空いていたわたしは、サンドウイッチと一緒に出されたお手拭きで簡単に手を拭き、一つつまんで口にさきつり込んだ。

食べたい」との無い具のサンドwichだけ、これはこれで美味しい。

わたしの向かい側に腰を下ろしたシャンさんは、パクパクとサンドwichを平らげていくわたしをジッと観察していた。

観られていて気分が良いものではないけど、シャンさんと付き合つていくなら仕方ない事なのかも知れない、と半ば諦めたわたしは気にせず口を動かした。

「 皿かつたか」

綺麗になつたお皿に視線を向け、シャンさんは興味なさそうに呟いた。

「 美味しかつたです。」 しゃべりをまどした

お腹が満たされて落ち着いたわたしは、シャンさんに向かつて笑いかけた。

「 そうか」

ほんの少しだけ表情が和らいで見えたのは、わたしの氣のせいかな?

シャンさんはわたしを見つめて、何を思ったかずいと顔を近づけてきた。

「え わあ！？」

犬や猫がするように、ペロッと唇の端を舐められて飛び上がる。

せりつとしたなんとも言えない感触にゾクッと鳥肌が立つた。

「ちよつ、ちよつと…」きなり何するんですか？！」

「特別言い物でもないんだがな」

「はあ？」

「暫く休憩にする。好きにして良い」

舐められた口元を押されてソファーから飛び降りたわたしに、一瞥をくれたシャンさんは、スタスターとお皿を持って行つてしまつた。

「なに、一体」

これがスキンシップだと言うなら、このちの世界の文化を本氣で疑う。

それに好きにして良いって言われても困るよ。

ソファーに座り直して、軽いショックから立ち直つたわたしは、手持ち無沙汰になつて室内をウロウロしてついた。

シャンさんの気配が完全になくなつて、彼女もどこかに行つたんだろうと思つたわたしは、そろつと部屋を出て辺りを見渡した。

この日は誰もここに来ていないうしく、シーンと静まり返つていた。

天井を仰ぎ見てみると、天窓から眩しい太陽の光が差し込んでいた。

「じうせなら最上階まで上つてみよー」

行くなつて言われてないし平氣だらう、と勝手に解釈して階段を上りはじめた。

その階毎に壁に飾られてる絵画が違つて面白い。

まるで小さい美術館に来たみたいで。

わたしはキヨロキヨロ辺りを見ながら順調に上つていった。

他の部屋には入るなと言っていたから、さすがに言い付けを破ろうとは思わなかつたけど、他はどんな部屋になつてゐるのか気になつた。

「はあー 着いた。脚痛い 」

一番上の階まで上りきつたわたしは、痛む太ももを叩いて一息つく。

最上階も他の階と同じ様に5つドアがあつたけど、そのうちの一つのドアが少しだけ開いていた。

「あれ?」

誰かいるのかな?

そつと近づいて聞き耳を立ててみる。

よくは聞き取れないけど女の人の声がした。

会話をしているようだから2人はいるみたいだ。

言い争つてるような、和やかな雰囲気ではないような、そんな感じがする。

どう考えてもここに居ちゃいけないと思つたけど、わたしは好奇心に負けてほんの少しだけドアを押してしまつた。

中から微かに漏れるソプラノな声に聞き覚えがあつたものだから。

ルル ?

ちょっと中を確認するだけ、とそんな軽い気持ちで覗いてみた。

ルールシエルが居たら声をかけようと思つて。

だけどドアの隙間から見たその光景に、わたしは文字通り固まつてしまつた。

大きめのソファーの上で重なる2人のシルエットが目に入り、全身から冷や汗が吹き出した。

『あつ まだ話がつ ん、』

『もついい』

『つ あつー』

真つ赤なドレスを身に纏つた女人をソファーに押し倒して、組み

伏せてるのは紛れも無くルール・シエル、彼だ。

馬乗りになつた彼はその人の首筋に顔を埋めていて、わたしからその表情は伺えない。

女の人が吐き出すなまめかしい吐息が嫌に耳についた。

組み伏せられた女の人の細い腕がルール・シエルの首に回り、彼の手がドレスの裾をたくしあげた時、わたしの脚は反射的に動き出していた。

時間をかけて上ってきた階段を一気に駆け降り、さつきまで居た13階の一室に飛び込む。

後ろ手に閉めたドアが派手な音を立てたけど、氣にしてる余裕なんて微塵も無い。

ドアに寄り掛かつて乱れた呼吸を整えた。

今見た光景が目に焼き付いてしまつて消えてくれやしない。

ぎゅっと心臓を捕まれたような感じがする。

初めて実際に目の当たりにした、そういう場面に動搖を隠せず、じわじわと身体の血液が顔に集中していくようだ。

わたしは熱をもつた頬を両手で包み、ズルズルとしゃがみ込んだ。

「あれ ルルだったよね 」

信じたくない気持ちが強い一方、ルールシエルを見間違えるはずがないという、確信に近いものを感じていた。

こっちの世界に来て、無条件で信頼を寄せていたルールシエルが、別人の様に見えたのを認めたくないのかもしれない。

いつも優しくて大人なルールシエルが、力に任せて女人を組み敷くなんて信じられない。

女人も女人で、本氣で嫌がつて拒絶してる様には見えなかつたし。

やつぱり2人はそういう関係なのかな

あの後2人がどうなつたかなんて、全く経験の無いわたしにだつて想像はつく。

考えれば考えるほど、気分は悪くなつてほてつた頬から血の気が引いてくようだ。

「はあああー なんか、なあ」

変なモヤモヤが心に居座るようで気持ち悪い。

「そんなどこで何をしている」

膝に埋めていた顔を上げると、マグカップを2つ持つてソファーに座ろうとしているシャンさんが、わたしに怪訝な顔を向けていた。

ドアの前で膝を抱えて座り込んでいたわたしは、ノロノロと立ち上

がつてシャンさんの隣まで歩いていく。

「 なんでもない、です」

「 顔色が冴えないな。 ビリした」

説明する気にもなれず、脱力感にみまわれるわたしを見て、彼女は何か感づいたみたいだ。

「 21階に行つたのか?」

21階と言う単語にピクリと反応してしまい、それに気づいたシャンさんはああ、と小さくため息をこぼす。

「 最上階は主の私室でもあると、言い忘れていた。もつぱら女との逢い引きに使われている 最近はあまり見なかつたんだがな」

「あ、アイビキ ですか」

ガーンと頭を叩かれたような衝撃を受け、呆然とシャンさんを見つめると、彼女はなんてことも無いように言い放つた。

「なんだ、知らなかつたのか。おまえも愛人のうちの一人になつたんだろ?」

あいじんのうちのひとり?

アイジンのうちの一人

愛人のうちの一人 ?

友達じゃなくて?

恋人、じゃなくて?

「愛人、だなんて わたしそんなつもりじゃない」

ルールシェルはわたしを愛人として側においてたの?

だからあんな風に接してたの?

やつぱり、ルールシェルにとつてはなんて事の無いことだつたんだ
今までのすべてが。

「わたし いろいろ初めてだつたのになあ」

思わず呟いた声は、消え入りそうなくらい小さくものだった。

わたしにとつてルールシェルは特別だつたんだと思つ。

だけど彼にとつてわたしは特別じゃなかつた。

たつたそれだけの事なのに、わたしの頭は真っ白になつてしまつた。

15_新たな一面(3)(後書き)

読んでいただきまして、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1338o/>

永久の契約

2011年2月22日08時30分発行